

黒谷上人語灯録
(和語)

〈凡例〉

(一) 底本に元亨版『和語灯録』(元亨元年刊、龍谷大学図書館蔵、龍谷大学善本叢書として影印)を用いた。

(二) 漢字表記は原則として通行の旧字体とした。

(三) □は虫食いなどにより底本で判読不能であることを示す。

(四) 底本には後筆で音訓が付されている。この来歴は定かではなく、必ずしも浄土宗として一般的な読みではないが、参考のためあわせて付した。また底本には後筆で訓点が付されている場合がある。その点はレ点を用いず、いわゆるかりがね点を使用してあるが、出版の都合上、レ点に改めた。

(五) 底本で片仮名文字のハ・ニ・ミ等が使用されている場合は、これを使用した。

(六) 「」は、底本での改行個所を示す。

(七) 「」は底本の丁数を示す(例えば「一・オ」は二丁のおもてが始まることを意味する)。

*漢字表記について：原則として、一般的な旧字を用いたが、必ずしも字体は統一されていない。

〔二・才〕

黒谷 上人語燈錄卷 第十一 并序

猷欣 沙門了惠集錄

日本に浄土教の
氣運熟す

聖徳太子の御消
息

しつかにおもんみれハ良醫りやういのくすりハやまひのし」なよてあらはれ如來の御のり
 ハ機きの熟しゆくする」にまかせてさかりなり日本一州しゅう淨機純しゆんしゆく熟じゆくして」朝野てうや遠近えんこんミな淨土に
 歸くみし緇素しそ貴賤きせんことくく往わう」生せいを期こすその濫觴らんさうをたつぬれハ天國あまつくに排開ひやくわい廣庭くわうてい天てん」
 一皇わう明めい御世ごせいに百濟はくさい國こくより釋迦しやくか彌陀みたの靈像れいざうはし」めてこのくににわたり給へり釋迦
 ハ撥遣はつけんの教けう」主彌陀しゆみたハ來迎らいかうの本尊ほんそんなれハ二尊心そんしんをおなしく」して往生しやうじやうのみちをひろめ
 んかためなるへし」しかれハ小墾せうこん田てん天皇てんわう古こ推すいの御時ごじ聖徳しやうとく太子たいし二佛ふつの」御心ごしんにしたか
 はせ給ひて七日しちじつ彌陀みたの名號なごうを」稱しょうして祖王そわう明めいの恩おんを報ほうし御文ごぶんを善光ぜんくわう寺じの」〔二・才〕
 如來にょらいへたてまつり給ひしかは如來にょらいみつから御返ごへん」事ことありき太子たいしの御消息ごせうそくにいはく」

名號なごう稱しょう揚やう七日しちじつ已おほて斯これハ此こなた爲な報ほう二廣ふたひろ大恩おほい」

仰願あうき願ねがハ本師ほんし彌陀みた尊そん助たすけ我われ一濟いちさい度ど常護じやうご念ねん」

如來の御返事にいはく」

一念ねん稱しょう揚やう無な二恩ふたおん留とど一ひと何いかに況いはんや七日しちじつの大おほ功こう徳とく」

我待われまつこと二衆生しゆじやう一心いしん無なレ間ひま汝能よくさい濟さい度ど豈あに不さらんやレ護まほら」

浄土教弘まり法
然上人浄土宗を
開く

法然上人門下に
異説競い起る

「和語灯録」編
纂の意趣

「一・ウ」太子つるに往生を異境にあらハして利益を本」朝にしめし給ひきその、ち
おほのてんわう
大坎天皇の御時彌陀」観音化しきたりて極樂の曼陀羅をおりあ」らハして往生の本尊
とされためおき給ふこ、に六」字の功德ほ、あらハれて二尊の本意やうやく」ひろまり
しかハ行 基菩薩慈覺大師等の聖」人ミな極樂をねかひてさり給ひき恵心僧都ハ楞
「三・オ」嚴の月のまゑに往生の要文をあつめ永觀律」師ハ禪林の花のもとに念佛
の十因を詠し」ておのく淨土の教行をひろめ給ひしかとも往」生の化道いまたさ
かりならさりしになかころ黒」谷の上人勢至菩薩の化身としてはしめて彌陀」の願
意をあきらめもハら稱名の行をす、め」給ひしかハ勸化一天にあまねく利生萬人
におよふ「三・ウ」淨土宗といふ事ハこの時よりひろまりけるなり」しかれハ往生
の解行をまなふ人ミな上人をもて祖」師とすこ、にかのなかれをくむ人おほきなかに
おのく」義をとる事まちくなりいはゆる餘行は本願か」本願にあらざるか往生す
るやせずや三心のあり」さま二修のすかた一念多念のあらそひなりまこ」とに金鑰し
りかたく邪正いかてかわきまふへき「四・オ」なれハきくものおほくミなもとをわす
れてなかれに」したかひあたらしきを貴てふるきをしらす尙」書にいえる事あり人
たミふるきを
貴レ舊一器 貴レ新一予この文に」おとろきていき、か上人のふるきあとをたつ
うつハものハ
ねて」や、近代のあたらしきみちをすてんとおもふ仍て」あるひハかの書狀をあつめ

あるひは書籍しよしやくにの「するところの詞ことを拾ひらふやまとことはハその文見もんや「四・ウ」すくその心こころさとりやすしねかハくハもろく「の往き」生せいをもとめん人ひとこれをもて燈ともしみとして淨しやうと土つちのみ」ちをてらせとなりもしおつるところの書しよあ」らは後賢こうけんかならすこれに續つけ時に文永十二年ぶんえいねん正月廿五日上人遷化せんくゑの日報恩ほうおんの心さしをもて「いふ事しか也」和語第二之一わごたい 當卷たうくわんにあり 有三篇へん」

〔五・オ〕

三部經ふきやうのしやくたい 釋しやく 第一

御誓言ごせいごんのしよ 書第二

往生大要抄第三

三部經ふきやうのしやく 釋しやく 第一

黒谷くろたにのさく 作

淨土三部經

『大經』の四十八願の意は第十八願にあり

雙卷經さうくわんまじやくくわんきやう 觀經くわん 阿彌陀經あみだ これを淨土三部經しやうとふといふ」雙卷經さうくわんにハまつあミたほとけの四十八願くわんをとくのちちに願成くわんじやうしゆ 就しゆをあかせりその四十八願くわんといふは法藏比ほふさうひ「五・ウ」丘世自在くせしさいじやうふつ 王佛わうぶつの御まえにして菩提心ぼだいしんをおこし」て淨佛國土成しやうふつこくと 就衆生しやうじゆしゆしやうくわんの願くわんをたて給ふおよそそ」の四十八願くわんにあるいは無三惡趣むさんあくしゆともたてあるいハ」不更ふきやうあくしゆ 惡趣あくしゆともときあるいハ悉皆金色しつがいこんしきともいふハミな」第十八の願くわんのためなり設たといわれえんにほとけを 我得わがレ佛ぶつ一十方衆生のしゆしやうし」至

心信樂 欲レ生レ 我レ國一乃至十念 若不レ生一者 不レ取二正覺一といへるハ四十

八願のなかにこの願ことにすくれ「六・オ」たりとすそのゆえはかのくに、もしむま

る、衆生」なくハ悉皆金色無有好醜等の願もなに、よてか」成就せん往生する衆生

のあるにつきてこそ身」のいろも金色に好醜ある事もなく五通をも具し」宿命をも

さとるへけれこれによて善導釋して」の給ハく法藏比丘四十八願をたて給ひて願々」

にミな若我得レ 佛一十方衆生稱二我名號一願 生二我國一「六・ウ」下至二十

念一若不レ生一者 不レ取二正覺一云云 四十八願に一一に」ミなこの心ありと釋し給へり

およそ諸佛の願と」いふハ上 求菩提下化衆生の心なり大乘經にいハく菩薩 願

有三二種一上 求菩提二下化衆生 心也其」上求菩提 本意爲三易 濟二度 衆生一

云しかれハた、」本意ハ下化衆生の願にありいま彌陀如來の國」土を成就し給ふも

衆生を引接せんかためなり「七・オ」惣していつれのほとけも成 佛已後ハ内證 外用

の功」德濟度利生の誓願いづれもくミなふかくして勝」劣ある事なければとも菩薩の

道を行し給ひし」時の善巧方便のちかひミなこれまちくなる事也」彌陀如來ハ四位

の時もハラわか名號を念せんもの」をむかえんとちかひ給ひて兆載永劫の修行を衆

生に廻向し給ふ濁世のわれらか依怙末代の衆生「七・ウ」の出離これにあらずハ

なにをか期せんやこれによて」かのほとけも我建二超世願一となのり給へり三世の諸

諸仏の願の本意
は下化衆生にあ
り

弥陀因位の願の
本意も下化衆生
にあり

佛もいまたかくのごとくの願をおこし給ハす十方の「薩埵もいまたこれらの願ほ
 まさす斯願若剋」果大千應感動虛空諸天人當雨珍妙花とちかひ」給ひしかハ大地
 六種に震動し天より花ふりて」なんちまさきに正覺をなり給ふへしとつけたりき
 「八・オ」法藏比丘いまた成佛し給ハすともこの願うたかふ」へからすいかにいはん
 や成佛已後十劫になり給へり」信せずハあるへからす彼佛今現在世成佛當知本」誓
 重願不虛衆生稱念必得往生と釋し給へるは」これなり諸有衆生聞其名號信心歡
 喜乃至一念」至心迴向願生彼國即得往生住不退轉唯除五逆」誹謗正法文これハ
 第十八の願成就の文なり願にハ「八・ウ」乃至十念と、くといへともまさしく願
 成就のなかにハ」一念にありとあかせりつきに三輩往生の文あり」これハ第十九の
 臨終現前の願成就の文なり發菩提心等の業をもて三輩をわかつといえとも往生」
 の業ハ通してミな一向專念無量壽佛といえり」これすなはちかのほとけの本願なる
 かゆえなり」其佛本願力聞名欲往生皆悉到彼國自致不退」九・オ」轉といふ文あ
 り漢朝に玄通律師といふ□のあり」き小戒をたもてるものなり遠行して野寺に」宿
 したりけるに□房に人ありてこの文を誦す玄通これをき、て一兩遍誦してのちお
 もひいた」す事もなくてわすれにけりその、ちこの玄通」律師戒をやふれりそのつ
 ミによて閻魔の廳にい」たる時間魔法王の給ハくなんち佛法流布の「九・ウ」ところ

名号には無上の
功德あり

「觀經」の意は
念仏にあり

光明徧照の文

第十二、光明無
量の願

第十七、諸仏稱
場の願

にむまれたりき所學の法あらハすミヤ」かにとくへしとて高座にのほせ給ひきその時
玄通」高座にのほりておもひめくらすにすへて心にお」ほゆる事なし野寺に宿して
き、し文ありこ」れを誦せんとおもひいて、其佛本願力といふ文を」誦したりしか
ハ閻魔法王たまのかふりをかたふ」けてこれハこれ西方極樂の彌陀如來の功德を
「二〇・オ」とく文なりといひて禮拜し給ひき願力不思議な」る事この文に見えた
り佛語彌勒其有得聞彼佛」名號信心歡喜乃至一念當知此人爲得大利卽」是具足無上
功德文 彌勒菩薩この經を付屬し」給ふにハ乃至一念するをもて大利無上の功德と」
の給へり經の大意これらの文にあきらかなるも」のなり

「二〇・ウ」次に觀經にハ定善散善をときて念佛をもて」阿難に付屬し給ふ汝好持
是語といえるはこれ」なり第九の眞身觀に光明徧照十方世界念」佛衆生攝取不捨
といふ文あり濟度衆生の願」は平等にして差別ある事なけれども」無縁の衆生ハ利
益をかうふる事あたはずこ」のゆえに彌陀善逝平等の慈悲にもよほされて「一一・
オ」十方世界にあまねく光明をてらして一切衆生」にことく縁をむすはしめん
かために光明無」量の願をたて給へり第十二の願これなり名號をもて因として衆
生を引接し給ふ事を」一切衆生にあまねくきかしめんかために」第十七の願に十方世
界の無量の諸佛ことく」咨嗟してわか名を稱せずといは、正覺をとら「一一・

第十八、念仏往生の願

光明名号をもて十方衆生を摂化す

第十三、寿命無量の願

ウ」しといふ願をたて給ひて次に十八の願に乃至」十念若不生者不取正覺とたて給へりこれにて「釋迦如來この土にしてとき給ふかごとく十方に」もおのゝ恆河沙のほとけましくておなしく」これをしめし給へるなりしかれハ光明の縁」ハあまねく十方世界をてらしてもらす事」なく又十方無量の諸佛ミナ名號を稱讚し「二一・オ」給へハきこえずといふところなし我至成佛道」名聲超十方究竟靡所聞誓不成正覺とち」かひ給ひしハこのゆえなりしかれハ光明の縁と」名號の因と和合せは攝取不捨の益をかうふ」らん事うたかふへからすこのゆえに往生禮讚」の序にはく諸佛所證平等是一若以願行」來收非無因緣然彌陀世尊本發深重誓願「二一・ウ」以光明名號攝化十方といへり又この願ひさし」く衆生を濟度せんかたに壽命無量の願を」たて給へり第十三の願これなり惣しては」光明無量の願ハ横に一切衆生をひろく攝取」せんかためなり壽命無量の願ハ豎に十方世」界をひさしく利益せんかためなりかくのこと」くの因縁和合すれハ攝取の光明のなかに又化「二三・オ」佛菩薩ましくてこの人を攝護して百重千重」圍繞し給ふに信心いよ増長し衆苦ごとく」消滅す臨終の時ほとけみつから來迎し給ふに」もろくの邪業繫よくさふるものなしこれは」衆生いのちおはる時にのそみて百苦きたりせめて」身心やすき事なく惡縁ほかにひき妄念うち」にもよをして境界自體當生の三

種の愛心「二三・ウ」きおひおこる第六天の魔王この時にあたりて威勢をおこしてもてきまたけをなすかく」のこときの種々のさハリをのそかんかためにな」らす臨終の時にハみつから菩薩聖衆に圍繞せられてその人のまえに現せんとちかひ給へり」第十九の願これこれによて臨終の時いたれハ」ほとけ来迎し給ふ行者これを見たてまつりて「二四・オ」心に歡喜をなして禪定にいるかことくして」たちまちに觀音の蓮臺に乗して安養の寶池にいたる也これらの益あるかゆえに念佛衆」生攝取不捨といふなり又この經に具三心者必」生彼國ととけり三心といハ一にハ至誠心二にハ深心三にハ迴向發願心なり三心はまち／＼にわか」れたりといへとも要をとり詮をえらんでこれを「二四・ウ」いえは深心におさめたり善導和尚釋し給ハく」至といハ眞なり誠といハ實なり一切衆生の身口意」業に修するところの解行かならす眞實心の」なかななすへき事をあかさんとすほかに賢善」精進の相を現してうちに虚假をいたく事をえ」されといえりその解行といハ罪惡生死の凡夫彌」陀の本願によて十聲一聲決定してむまる」二五・オ」と眞實にさとりて行するこれなりほかにハ本願を信する相を現しうちハ疑心をいたくこ」れハ不眞實の心なり深心ハふかく信する心なり」決定してふかく自身ハ現にこれ罪惡生死の凡」夫なり曠劫よりこのかたつねに流轉して出離」の縁なしと信し決定してふかくこの阿彌陀

如來は四十八願をもて衆生を攝取し給ふ「一五・ウ」事うたかひなくおもんハかりな
 けれハかの願力くわんりきに乘しょうしてきたためて往生わうじやうする事をうと信しんすへし」といへりはしめに
 まつ罪惡生さいあくしやうし死しの凡夫曠劫ほんふくわうこくよりこのかた出離しゅつりの縁えんある事なしと信しんせよと「いへる
 ハこれすなはち斷善闡提たんぜんせんたいのことくなる」もの也か、る衆生しゅしやうの一念ねん十念ねんすれハ無始むしより
 ここのかたいまたいてさる生しやうし死しの輪迴りんゑをいて、かの極ごく「二六・オ」樂世界らくせかいの不退ふたいの
 國土こくとにむまるといふによりて「信心しんくはおこるへきなりおよそほとけの別願べつくわんの不ふ思議しぎ
 ハた、心のハかるところにあらす佛ほとけと佛ほとけと」のミよくしり給へり阿彌陀佛あみたほとけの名號みやうごうを
 となとな」ふるによて五逆ぎやく十惡あくことくくむまるといふ別願べつくわんの不思議ふしぎのちからまします
 たれかこれをうう」たかふへき善導ぜんたうの疏しよにいはいくあるいハ人ありて「二六・ウ」なんち
 衆生曠劫しゅしやうくわうこくよりこのかたおよひ今生こんじやうの身しん口意業くういごうに一切さいの凡聖ほんしやうの身のうゑにおいてつ
 ふふ」さに十惡五逆あくぎやく四重謗法闡提しじゆうほうせんたい破戒破見かいはい等の「つミをつくりていまたのそきつくす
 事あた」はすしかもこれらのつミは三界惡道さいあくたうに繫屬けぞく「すいかんそ一しやう生の修福しゆふく念佛ねんぶつを
 もてすなはちかの」無漏無生むろむしやうのくに、いりてなかく不退ふたいのくらる「二七・オ」を證しやう
 悟こする事をえんやといははいふへし諸佛しよぶつの「修行けうぎやうハかす塵沙ちんしゃにこへたり稟識ほんしきの機緣きえん
 隨したかてしやうに二情にじやう一ひとひ」とつにあらすたとへハ世間せけんの人のまなこに見つみつ」へく信しんしつへきかこと
 きハ明みやうよく暗あんを破はし空くう」よく有うをふくむ地ちよく載養さいやうしミつよく生潤しやうにん」し火ひよく成壞しやうゑ

するかことしかくのことさら」の事ことくく待對の法となつくすなはち「一七・ウ」みつから見るへし千差萬別なりいかにはんや」佛法不思議のちからに種々の益なからんや」といへり極樂世界に水鳥樹林の微妙の法を」さやつるハ不思議なれともこれらハほとけの願力」なれハと信してなんそた、第十八の乃至十念」といふ願をのミうたかふへきや惣して佛説を」信せはこれも佛説なり花嚴の三無差別般若「二八・オ」の盡淨 虛融法花の實相眞如涅槃の悉有」佛性たれか信せさらんやこれも佛説なりか」れも佛説なりいづれをか信しいづれをか信せ」さらんやそれ三字の名號ハすくなしといへとも」如來所有の内證 外用の功德萬億恆沙の」甚深の法門をこのうちにおさめたりたれか」これをはかるへきや疏の玄義分にこの名號を「二八・ウ」釋していはく阿彌陀佛といハこれ天竺の正音」こ、にハ翻して無量壽覺といふ無量壽といハこれ」法覺といハこれ人人法ならへてあらはすかるか」ゆえに阿彌陀佛といふ人法といハ所觀の境也」これについて依報あり正報ありといへりしか」れハはしめ彌陀如來觀 音勢至普賢文殊地藏」龍樹より乃至かの土の菩薩聲聞等にいたる「一九・オ」までそなへ給へるところの事理の觀 行定惠の」功力内證の智惠外用の功德惣して萬德無」漏の所證の法門ミなことくく三字のなかにお」さまれり惣して極樂界にいづれの法門かも」れたるところあらんしかるをこの三字の名號」を

ハ諸宗おの／＼わか宗に釋しられたり眞言」にハ阿字本不生の義四十二字を出生せり一「一九・ウ」切の法ハ阿字をはなれたる事なきかゆえに功徳甚深の名號といえり天台宗にハ空假中の「三諦正了縁の三義法報應の三身如來所有」の功徳これにてさるかゆえに功徳莫大なり」といへりかくのこく諸宗におの／＼わか存するところの法について阿彌陀の三字を釋せり」いまこの宗の心ハ眞言の阿字本不生の義も天「二〇・オ」台の三諦一理の法も三論の八不中道のむねも」法相の五重唯識の心も惣して森羅の萬法」ひろくこれを攝すとならふ極樂世界にもれ」たる法門なきかゆえにた、しいま彌陀の願の心ハかくのこくさとするにはあらずた、ふかく」信心をいたしてとなふるものをむかえんとなり」耆婆扁鵲が萬病をいやすくすりはもろ／＼の「二〇・ウ」草よろつこのくすりをもて合藥せりといえとも」病者これをさとりてその藥種何分その藥草」何兩和合せりとしらすしかれともこれを服」するに萬病こ／＼くゆるかこととした、しう」らむらくはこのくすりを信せずしてわか」やまひハきハめておもしろいか、このくすりにて」ハゆる事あらんとうたかひて服せずんハ「二一・オ」耆婆か醫術も扁鵲か祕方もむなしく」してその益あるへからさるかこと彌陀」の名號もかくのこくしそれ煩惱惡業」のやまひきわめておもしろいか、この名號」をとなえてむまる、事あらんとうたかひ」てこれを信せずハ彌陀の誓願 釋

尊そんの所しよ」説せつむなしくてそのしるしあるへからす「二・ウ」た、あふいて信しんすへし良りやう薬やくをえて服ふくせず」して死しする事なけれ崑崙こんろんのやまにゆきて」たまをとらすしてかえり梅檀まいたんのはやしにいり」て枝えだをよちすしてなハ後悔こうわいいか、せんみ」つからよく思量しりやうすへしそもくわれら曠劫くわうこつ」よりこのかた佛ほとけの出世しゆせにもあひけん菩薩ぼさつの化道くわだう」にもあひけん過去くわこの諸佛しよふつも現在げんざいの如來にやらいも「二・オ」ミなこれ宿世しゆくせの父母ふもなり多生たしやうの朋友ほうゆうなりかれ」ハいかにして菩提ぼだいを證しやうし給へるそわれハな」に、よて生死しやうしにハと、まるそはつへしハつ」へしかなしむへしかなしむへし本師ほんし釈迦しやか」如來にやらいの大罪さいのやまにいりて邪見しやけんのはやしに」かくれて三業さんごう放逸ほういつに六情ろくしやう全ぜんからさらん衆生しゆじやうを」わか國土こくとにハとりおきて教化けうくわ度脱たつせしめんと「二・ウ」ちかひ給ひたりしハそもくいかにしてかゝる」衆生しゆじやうをハ度脱たつせしめんとちかひ給ふそとた」つぬれハ阿彌陀あみだ如來にやらい因位いんゐの時とき無上むじやう念王ねんわうと申まを」して菩提ぼだい心しんをおこし生死しやうしを過度くわどせしめむと」ちかひ給ひしに釋迦しやか如來にやらいは寶海ほうかい梵志ぼんしと申まを」して無上むじやう念王ねんわうくにのくらゐをすて、菩提ぼだい心しん」をおこし攝取せつしゆ衆生しゆじやうの願がんをおこし給ひし時とき「二・オ」にこの寶海ほうかい梵志ぼんしも願がんをおこしてわれかならず」穢土えいとにして正覺しやうかくをなりて惡業あくごうの衆生しゆじやうを引いん」導たうせんとちかひ給ひてこの願がんをおこし給ふ也」曠劫くわうこつよりこのかた諸佛しよふつ出世しゆせして緣えんにしたかひ」機きをハかりておのく衆生しゆじやうを化度くわどし給ふ事ことかす」塵沙ちんしゃにすぎたりあるいハ大乘だいじやうをととき小乘しやうじやうを」ときあるいハ實教じつけうをひろめ

權教をひろむる「二三・ウ」縁の機ハミなことくその益をうこ、に釋尊」八相成道を五濁惡世にとなえて放逸邪見の」衆生の分離その期なきをあはれミてこれよ」りにしに極樂世界あり佛まします阿彌陀」となつたてまつるこのほとけハ乃至十念若不」生者不取正覺とちかひ給ひて佛になり給へ」りすみやかに念せよ出離生死のミちおほしと「二四・オ」いえとも惡業煩惱の衆生のとく生死をはなる、「事この門にすぎたるハなしとおしえてゆめく」うたかふ事なかれ六方恆沙の諸佛も證誠し」給ふなりとねんころにおしへ給ひてわれもし」ひさしく穢土にあらハ邪見放逸の衆生われを」そしりわれをそむきてかへりて惡道におち」なん濁世にいてたる事ハ本意た、この事を「二四・ウ」衆生にきかしめんかためなりとて阿難尊者に」なんちよくこの事を遷代に流通せよとねんこ」ろに約束しおきて跋提河のほとり沙羅林」のもとにして八十の春の天二月十五の夜半に」頭北面西にして滅度に入給ひきその時に日」月ひかりをうしなひ草木いろを變し龍神」八部禽獸鳥類にいたるまで天にあふきてな「二五・オ」き地にふしてさけふ阿難目連等のもろく」の大弟子等悲泣のなミたをおさへてあひ議し」ていはく釋尊の恩になれたてまつりて八十」の春秋をおくりき化緣こ、につきて黄金の」はたえたちまちにへた、り給ひぬあるいハわれら」世尊に問たてまつるに答へ給へる事もありき」あるいハ釋尊みつから告給ふ事もあ

善導大師（弥陀の化身）が釈尊の本懐を述べたまう

自信教人信

廻向発願心の釈

りき濟「二五・ウ」度利生の方便いまハたれにむかひてか問たて」まつるへきすへからく如來の御ことハをしるしお」きて未來にもつたへ御かたみともせんといひて多」羅葉をひろいてことくこれをしるしおきし」を三藏たちこれを譯して唐土へわたし本」朝へつたへ給ふ諸宗につかきとるところの一代」聖教これしかるに阿彌陀に由来せんくわしやう
如來善導和尚と「二六・オ」なのりて唐土にいて、如來出 現於五濁 隨機 方便化群萌或説多聞而得度或説小解證」三明 或教福惠雙除障 或教禪念坐思量種」種法門皆解脫無過念佛往西方上 盡一形」至十念三念五念佛來迎直爲彌陀弘誓重」致使凡夫念即生との給へり釋尊出世本懐」た、この事にありといふへし自信教人信難「二六・ウ」中轉更難大悲傳普化眞成 報佛恩といへは」釋尊の恩を報するハこれたれかためそやひと」えにわれらかためにあらすやこのたひむな」しくてすきなは出離いづれの時をか期せんと」するすみやかに信心をおこして生死を過度す」へし次に廻向發願 心といハ人ことに具しつへき」事なり國土の快樂をき、てたれかねかは「二七・オ」さらんやそもくかの國土に九品の差別あり」われらいつれの品をか期すへき善導和尚の」御心は極樂彌陀は報佛報土也未斷惑の凡」夫すへてむまるへからすといへとも彌陀の別」願 不思議にて罪惡生死の凡夫一念十念して」むまると釋し給へりしかるを上古よりこのかた」おほく下品といふとも足ぬへしといひて上品を

「二七・ウ」ねかはすこれハ惡業あくごうのおもきをおそれて心こころを上のぼす品ほんにかけざる也もしそれ惡業あくごうによらハ惣そうして往生わうじやうすへからす願力くわんりきによてむまれハなんそ上品ほん」にす、まん事をかたしとせん惣そうしてハ彌陀淨土ミタシやうとをまうけ給事ハ願力くわんりきの成就じやうじゆするゆえなりしか」れハ又念佛衆生のむまるへきくになり乃至十じゆ念若ねんにやく不生じやうじやふ者不取正覺しゆじやうかくとたて給ひてこの願くわんに「二八・オ」よて感得かんとくし給ふところなるかゆえなりいま又くわんじやう觀經の九品の業ごうをいはハ下品ハ五逆きやく十惡あくの罪人さいにん臨終りんしゆの時ときはしめて善知識ぜんちしきのす、めによてあ」るいは十聲じゆあるいハ一聲しやう稱念じやうじゆねんしてむまる、事ことをえたりわれら罪業さいごうおもしろいへとも五逆きやくをは」つくらす行業きやうごうおろそかなりといへとも一聲しやう十聲じゆ」にすきたり臨終りんしゆよりさきに彌陀ミタの誓願せいぐわんを聞き「二八・ウ」得えて隨分ずいぶんに信心しんくをいたすしかれハ下品ほんまでく」たるへからす中品ほんハ小乘じやうぢの持戒ちがいの行者きやうじやけうぢやう孝養しんぎ禮智れいち信等しんどうの行人きやうにんなりこの品ほんにハ中ちゆうに」むまれかたし小乘じやうぢの行人きやうにんにもあらずたもち」たる戒がいもなければわれらか分ぶんにあらず上品ほんハ大乘じやうぢの凡夫ぼんぷ菩提心ぼだいしん等の行きやうなり菩提心ぼだいしんハ諸宗しよしゆ」おのく心こころえたりといふ淨土宗じやうとしゆの心こころハ淨土じやうとにむま「二九・オ」れんとねかふを菩提心ぼだいしんといふ念佛ねんぶつこれ大乘じやうぢの行きやうなり無上むじやう功德とくなりしかれハ上品ほん往生わうじやうハ手てを」ひくへからす又本願ほんくわんに乃至ないし十念じゆとたて給ひて臨終りんしゆ現前げんぜんの願くわんに大衆だいじゆと圍繞あむねせられてその人ひとのまえに現げんせんとた給へり中品ほんハ聲聞衆しやうもんじゆの來迎らいかう下品ほんは化佛くわふつの三尊さんそんあるいハ金蓮花こんれんくゑ等の來迎らいかうなりし

三万以上は上品
上生の業

『小経』の意

念仏は弥陀の本願・釈迦の説法・諸仏の証誠の行なり

かるを大衆と圍繞して現せんと「二九・ウ」たて給へる本願の意趣ハ上品の來迎をま
□「け給へりなんそあなちにあひすまはんや」又善導和尚三萬已上は上品上生の
業との給へり數遍によて上品にむまるへし又三」心について九品あるへし信心によ
て上品に」むまるへしと見えたり上品をねかふ事ハわか」身のためにハあらずかのく
に、むまれおはりて「三〇・オ」かえりてとく衆生を化せんかためなりこれ」あにほ
とけの御心になはさらんや」

次に阿彌陀經ハまつ極樂の依正の功德をと」くこれ衆生の願樂の心をす、めんかた
め」なりのちに往生の行をあかすに少善根をも」てハむまる、事をうへからす阿彌陀
佛の名」號を執持して一日七日すれハ往生する事「三〇・ウ」をうとあかせり衆生こ
れを信せさらん事を」おそれて六方におのく恆河沙の諸佛ましく」て大千の舌相
をのへて證誠し給へり善導」釋していはくこの證によてむまる、事をえ」すハ六方
如來の、へ給へるしたひとたひくちよ」りいてをはりてなかくくちに返りいらすし
て」自然に壞爛□んと給へりしかれハこれをう」三」一・オ」たかはんものハ彌陀の
本願をうたかふのみに」あらず釋尊の所説をうたかふなり釋尊」の所説をうたかふ
は六方恆沙の諸佛の所説をうたかふなりすなハちこれ大千のへ給」える舌相を壞
爛する也もし又これを信せ」はた、彌陀の本願を信するのみにあらず」釋尊の所説

を信するなり釋尊の所説を「三二・ウ」信するハ六方恆沙の諸佛の所説を信する也」一切の諸佛を信するは一切の法を信するに」なる一切の法を信するは一切の菩薩を信するになるこの信ひろくして廣大の信心」なり善導和尚のいはく爲レ斷二凡一夫疑見執二皆舒舌相一覆二三千一證三七一日稱二名號一又表二釋一迦言說眞一六方如來舒舌證專稱名號至西「三二・オ」方た彼花開聞妙法十地願行自然彰心々」念佛莫生疑六方如來證不虛三業專心無」雜亂百寶蓮花應時現」文」

御誓言の書 第二

もろこしわか朝にももろくの智者たちの」沙汰し申さる、觀念の念にもあらず又學問」をして念の心をさとりて申す念佛にもあら「三二・ウ」すた、往生極樂のためにハ南無阿彌陀佛と」申してうたかひなく往生するそとおもひと」りて申すほかにハ別の子細候はすた、し」三心四修なんと申す事の候ハミな決定して」南無阿彌陀佛にて往生するそとおもふう」ちにこもり候なりこのほかにおくふかき事を」存せは二尊の御あはれミにはつれ本願にも「三三・オ」れ候へし念佛を信せん人ハたとひ一代の御の」りをよくく學すとも一文不知の愚鈍の身に」なして尼入道の無智のともからにおなしく」して智者のふるまひをせすしてた、一向」に念佛すへし」

「三三・ウ」

これハ御自筆の書なり勢觀聖人に」きつけられき

往生大要抄第三 沙門源空

いまわか淨土宗にハ二門をたて、釋迦二代の「説教をおさむるなりいはゆる聖道門

淨土門」なりはしめ花嚴阿含よりおハリ法華涅槃にいたるまで大小乗の一切の諸

經にとく」ところのこの娑婆世界にありなから斷迷「開悟のミちを聖道門とハ申す

なりこれに「三四・オ」つきて大乘の聖道あり小乗の聖道あり」大乘にも二ありす

なハち佛乘と菩薩と也」小乗に二ありすなハち聲聞と緣覺との二乘」なりこれをす

へて四乘となつく佛乘とハ即身」成佛の教なり眞言達磨天台花嚴等の」四乘にあか

すところなりすなハち眞言宗に」ハ父母所生身速證大覺位と申してこの身「三四・

ウ」なから大日如來のくらるにのほるとならふ」也佛心宗にハ前佛後佛以レ心一傳レ

心一とならひて」たちまちに人の心をさしてほとけと申なり」かるかゆえに即身是佛

の法となつて成佛」とは申さぬなりこの法ハ釋尊入滅の時涅槃經をときおハ

りてのちた、一偈をもちて」迦葉尊者に付囑し給へる法なり天台宗「三五・オ」にハ

煩惱即菩提生死即涅槃と觀して觀心」にてほとけになるとならふ也八歳の龍女か

南」方無垢世界にしてたちまちに正覺をなり」しその證なり花嚴宗にハ初發心時便

二、菩薩乘

三、緣覺乘
四、声聞乘

四乘すなわち聖
道門は証し難し

成「正覺」とて又即身成佛とならふなりこれらの宗に「ハミな即身頓證のむねをのへて佛乘となつ」くるなりつきに菩薩乘といハ歴劫修行成「三五・ウ」佛の教なり三論法相の二宗にならふところ」なりすなはち三論宗にハ八中道の無相の觀に住してしかも心にハ四弘誓願をおこし」身にハ六波羅密を行して三僧祇に菩薩の行を修してのちほとけになると申す也法相宗」にハ五重唯識の觀に住してしかも四弘をおこし六度を行して三祇劫をへてほとけに「三六・オ」なると申すなりこれらを菩薩乘となつくと」きに緣覺乘といハ飛花落葉を見てひとり諸」法の無常をさとりあるいは十二因縁を觀」してときハ四生おそきハ百劫にさとりをひらく」なりつきに聲聞乘といハはしめ不淨數息」を觀するよりおハ四諦の觀にいたるまでと」きハ三生おそきハ六十劫に四向三果のくらる「三六・ウ」をへて大羅漢の極位にいたる也この二乗の道」ハ成實俱舍の兩宗にならふところ也又聲聞に」つきて戒行をそなふへし比丘ハ二百五十戒」を受持し比丘尼ハ五百戒を受持するなり」五篇七聚の戒となつくる也又沙彌々々尼の」戒式沙摩尼の六法優婆塞優婆夷の五戒ミナ」これ律宗のなかにあかすところ也およそ大小「三七・オ」乘をえらはすこの四乗の聖道ハわれ□□身に」たへ時になひたる事にてハなき也もし聲」聞のみちにおもむく□二百五十戒たもちかたし」苦集滅道の觀成しかたしもし緣覺の觀」をもとむとも飛花落葉の

さとり十二因縁の「観」ともに心もおよはぬ事なり三聚十重の戒行發得しかたし四

弘六度の願行成熨しかた「三七・ウ」し身子ハ六十劫まで修行して乞眼の惡縁に

あひてたちまちに菩薩の廣大の心をひるかへしきいはんや末法のこのころをや下

根のわれらをやたとひ即身頓證の理を觀すとも眞言の入我々入阿字本不生の觀

天台の三觀六即中道實相の觀花嚴宗の法界唯心の觀佛心宗の即身是佛の觀理

ハふかく解ハ□□し「三八・オ」かるかゆえに末代の行者その證をうるにきハめ

てかたしこのゆへに道綽禪師ハ聖道の一種は今時ハ證しかたしとの給へりすなハ

ち大集の月藏經をひきておのく行すへきありやうをあかせりこまかにのふるに
およハす」

浄土門

道綽禪師

浄土門はひろく
万人に通ず

つきに浄土門ハまつこの娑婆世界をいとひすて、いそきてかの極樂浄土にむまれ

てかのくに、「三八・ウ」して佛道を行する也しかれハかつく浄土にいたるま

ての願行をたて、往生をとくへきなりしかるにかのくに、むまる、事ハすへて行

者の善惡をゑらはすた、ほとけのちかひを信じ信せざるによる五逆十惡をつく

れるものも」た、一念十念に往生するハすなハちこのことハ」り也このゆへに道綽ハ

た、浄土の一門の□あり「三九・オ」て通入すへきみちなりと釋し給へ□通し」て

いるへしといふにつきてわたくしに心うる」に二つの心あるへし一にハひろく通し二

にハ□を「く通すひろく通すといハ五逆の罪人をあけて」なを往生の機におさむいはんや餘の輕罪をや」いかにいはんや善人をやと心えつれハ往生のうつ」ハものにきらはる、ものなしかるかゆえにひろ「三九・ウ」く通すといふ也とをく通すといハ末法萬年の、「ち法滅百歳までこの教と、まりてその時に」き、て一念するミな往生すといへりいはんや末」法のなかをやいかにいはんや正法像法をやと心」えつれハ往生の時もる、世なしかるかゆへに」とをく通すといふなりしかれハこのころ生死をはなれんとおもはんものハ難證の聖道をすて「四〇・オ」て易往の淨土をねかふへき也又この聖道淨土をハ難行道易行道となつたりたとへをとりて「これをいふにハ難行道とはさかしきみちをか」ちよりゆかんかことし易行道とハ海路をふねよ」りゆくかことしといへりしかるに目しるあし」なえたらんものハ陸地にハむかふへからすた、ふね」にのりてのミむかひのきしにハつくへき也「四〇・ウ」しかるにこのころわれらハ智慧のまなこしるて」行法のあしおれたるともから也聖道難行の」さかしきみちにハすへてのそミをたつへし」た、彌陀の願のふねにのりてのミ生死のう」ミをわたりて極樂のきしにハつくへきなり」いまこのふねといハすなハち彌陀の本願にたとふ」る也この本願といハ四十八願也そのなかに第十「四一・オ」八の願をもて衆生の往生の行のさためたる」本願とせり二門の大旨略してかくのこと

道綽・善導の釈をもて三部經を習うべし

安心と起行の相應

し」聖道の一門をさしおきて淨土の一門にいらん」とおもはん人ハ道綽善導の釋をもて所依の三部經を習ふべきなりききにハ聖道淨土の二門を分別して淨土門にいるべきむねを」申ひらきついまハ淨土の一門につきて修行「四一・ウ」すへきやうを申すへし」

淨土に往生せんとおもハは心と行との相應すへ」きなりかるかゆへに善導の釋にいはくたゝし」その行のミあるハ行すなはちひとりにして」又いたるところなし、その願のミあるハ願」すなハちむなくして又いたるところなし」かならず願と行とをあひともにたすけて「四二・オ」ためにミな剋するところ也およそ往生のミに」かきらす聖道門の得道をもとめんにも心と」行とを具すへしといへり發心修行となつくるこ」れなりいまこの淨土宗に善導のこごとくハ安心起行となつたりまつその安心といハ觀無量壽經にといはいはくもし衆生ありてかの」くに、むまれんとねかはんものハ三種の心を「四二・ウ」おこしてすなハち往生すへしなにをか三とする」一にハ至誠心二にハ深心三にハ迴向發願心なり三」心を具するものハかならずかのくに、むまると」いへり善導和尚の觀經の疏ならひに往生禮讚の序にこの三心を釋し給へり一に至誠心」といハまつ往生禮讚の文をいたさは一にハ至誠心いはゆる身業にかのほとけを禮拜せんにも口業「四三・オ」にかのほとけを讚嘆稱揚せん

至誠心の釈

にも意業にかの「ほとけを専念観察せんにもおよそ三業をおこ」すにハかならず眞實をもちるよかるかゆへに「至誠心となつくといへりつきに觀經の疏の文」をいたさは一に至誠心といハ至といハ眞なり誠」といハ實なり一切衆生の身口意業の所修の「解行かならず眞實心のなかならずへき事を「四三・ウ」あかさんとおもふほかにハ賢善精進の相を現して」うちにハ虚假をいたく事なかれ善の三業をおこす事ハかならず眞實心のなかならずへし」内外明闇をゑらはすミナ眞實をもちるよと」いへりこの二つの釋をひいてわたくしに料簡「するに至誠心といハ眞實の心なりその眞實と」いハ内外相應の心なり身にふるまひ口にいひ意「四四・オ」におもはん事ミナ人めをかざる事なくま事」をあらはす也しかるを人つねにこの至誠心」を熾盛心と心えて勇猛強盛の心をおこすを至」誠心と申すハこの釋の心にハたかふ也文字も「かはり心もかはりたるものをされハとしてその」猛利の心ハすへて至誠心をそむくと申にハあ」らすそれハ至誠心のうゑの熾盛心にてこそ「四四・ウ」あれ眞實の至誠心を地にして熾盛なるハすく」れ熾盛ならぬハおとるにてある也これにつきて」九品の差別までもこ、ろうへき也されハ善導の「觀經の疏に九品の文を釋するしたに一一の品」ことに辨定三心以爲正因とさためてこの三心ハ」九品に通すへしと釋し給へり惠心もこれを」ひきて禪師の釋のときハ理九品に通すへ「四五・オ」しと

こそハしるされたれこの三心さんしんの中なかかの「至誠ししやうしん心しんなれハ至誠ししやうしん心しんすなハち九品ほんに通つうすへき」也又至誠ししやうしん心しんハ深心しんくと廻向發願ゑかうほつくわんしん心しんとを體たいとすこ」の二ふたをはなれてハなに、よりにか至誠ししやうしん心しんをあらはすへきひろくほかをたつぬへきにあらす深しん心しんも廻向發願ゑかうほつくわんしん心しんもまことなるを至誠ししやうしん心しんとハなつくる也三心さんしんすてに九品ほんに通つうすへしと心こころえての「四五・ウ」うゑにハその差別しゃべつのあるやうをこ、ろうるに三心さんしんの淺深強弱せんしんかうじやくによるへき也かるかゆへに上品上生ほんじんじやうじやうにハ經きやうに精進勇猛しやうじんゆうめうなるかゆへにと、き釋しゃくにハ日にっ數じゆすくなしといへとも作業さぎごうはけしきかゆへにと「いへり又上品中生ほんじんじやうじやうをハ行業ぎやうごうや、よはくしてと」釋しゃくし上品下生ほんじんげじやうをハ行業ぎやうごうこわからすなんと釋しゃくせ」られたれハ三心さんしんにつきてこわきもよわきもあ「四六・オ」るへしとこそこ、ろえられたれよわき三心さんしん具ぐ足そくしたらん人ひとハくらるこそさからんすれなを」往生わうじやうハうたかふへからさる也それハ強盛かうじやうの心しんを」おこさすハ至誠ししやうしん心しんかけてなかく往生わうじやうすへからす」と心こころえてみたりに身みをもくたしあまさへ人ひと」をまかろしむる人ひとの不便ふびんにおほゆる也さら」なり強盛かうじやうの心しんのおこらんハめてたき事ことなり善ぜん「四六・ウ」導たうの十徳じゆとくの中なかにはしめの至誠念佛ししやうねんぶつの徳とくを」いたすにも一心しんに念佛ねんぶつしてちからのつくるに」あらされハやます乃至寒冷ないしかんれいにも又あせをなか」すこの相狀さうじやうをもて至誠ししやうをあらはすなんとあ」るなれハたれくもさこそハはけむへけた、」しこの定ぢやうなるをのミ至誠ししやうしん心しんと心こころえてこれにた」かはんをハ至誠ししやうしん心しんかけ

内外相應―内には虚仮を懐くことなかれ

眞実心とは虚仮に対することば

たりといはんには善導の「四七・オ」ことく至誠心至極して勇猛ならん人ハかりそ」
往生ハとくへきわれらかこときの冠弱の心にて「はいか、往生すへきと臆せられぬへ
き也かれハ別し」て善導一人の徳をほむるにてこそあれこれハ」通して一切衆生の往
生を決するにてあれば「たくらふへくもなき事也所詮ハた、われらかこと」きの凡夫
をのく分につけて強弱眞實の心を「四七・ウ」おこすを至誠心となつけたるとこ
そ善導の釋」の心ハ見えたれ文につけてこまかに心うれハほかに」ハ賢善精進の相
を現しうちにハ虚仮をいたく」事なかれといふハうちにハをろかにしてほかにハ」か
しこき相を現しうちにハ惡をのミつくりて」ほかにハ善人の相を現しうちにハ懈怠に
して」ほかにハ精進の相を現するを虚假とハ申す也「四八・オ」外相の善惡をハか
へり見す世間の謗譽をハわき」まえず内心に穢土をもちとひ淨土をもねかひ」惡を
もと、め善をも修してまめやかに佛」の意にかなはん事をおもふを眞實とハ申也」眞
實ハ虚假に對することは也眞と假と對し虚」と實と對するゆへなりこの眞實虚假につ
き」てくハしく分別するに四句の差別あるへし」にハ「四八・ウ」ほかをかさりてう
ちにハむなしき人二にハほかを」もかさらすうちもむなしき人三にハほかハむなし」
く見えてうちハ有事ある人四にハほかにもまこ」とをあらハしうちにもまことある人
かくのことき」の四人のなかにハさきの二人をハともに虚假の行」者といふへしのち

の二人をハともに眞實しんじつの行者ぎやうしやと」いふへししかれハた、外相けさうの賢愚けんぐ善惡ぜんあくをハゑら
「四九・オ」はす内心ないしんの邪正しやしやう迷悟めいこによるへき也ひつおよその「眞實しんじつの心こころハ人ひとことに具くし
かたく事にふれてかけ」やすき心こころはへなりおろかにはかなしといまし」められたるや
うもあることハリ也無始むしよりこの「かた今身こんしんにいたるまでおもひならハしてさし」も
ひさしく心こころをはなれぬ名利みやうりの煩惱ぼんなんなれハた」たんとするにやすらかなにはなれかたき
なりけり「四九・ウ」とおもひゆるさる、かたもあれとも又ゆるし」はんへるへき事
ならねハわか心こころをかへりみてい」ましめなをすへき事也ごとしかるにわか心の程ほど」もおも
ひしられ人のうゑをも見るにこの人め」かさる心ハハいかにもく「おもひはなれぬ
こそ返かへく」心こころうくかなしくおほゆれこの世よハかりをふかく」執とする人ハた、まなこ
のまえのほめられむ□「五〇・オ」しき名をもあけんとおもはんをはいふにたらぬ」
事にておきつうき世をそむきてまことのミち」におもむきたる人くくのなかにも返り
てはかな」くよしなき事かなとおほゆる事もある也」むかしこの世よを執とする心こころのふ
か、りしなこり」にてほとくにつけたる名利みやうりをふりすてたる」ハかりをありかた
くいミしき事におもひてやかて「五〇・ウ」それをこの世よさまにも心のいろのうるせ
きにとり」なしてさとりあさき世間せけんの人の心こころのそこをは」しらすうゑにあらはる、す
かた事からハかりを」たとかりいミしかるをのミ本意ほんいにおもひて」ふかき山やまちをたつ

ねかすかなるすミかをしむる」までもひとすちに心のしつまらんためとしも」おもは
ておのつからたつねきたらん人もしは「五一・オ」つたへきかん人のおもはん事をの
ミさきたて、「まかきのうち庭にハのこたち菴室あんしつのしつらひ道たう」場ちやうの莊しやう嚴ごんなんとたとく
めてたく心こころほそく物ものあ」はれならん事からをのミひきかえんと執しつする」ほとに罪つみの事も
ほとけのおほしめさん事をハ」かえりみす人のそしりにならぬ様やうをのミお」もひいと
なむ事よりほかにハおもひましふる「五一・ウ」事もなくてま事しく往生をねかふへ
きかたを」ハ思もいれぬ事なんとのあるかやかて至誠ししやうしん心か」けて往生せぬ心はへに
である也又世をそむき」たる人こそ中ちゆうひしり名みやうもん聞もんもありてさや」うにもあれ世
にありながら往生をねかはん」人ハこの心ハなにゆへにかあるへきと申す人の」ある
ハなをこまやかに心えさる也世よのほまれ□「五二・オ」おもひ人めをかさる心ハなに
事にもわた□「事なれハゆめまほろしの榮花重職えいけうじゆうしよくをおもふ」のミにハかきらぬ事にて
ある也中ちゆう在家さいけの男おとこ」女おんなの身みにて後世ごせをおもひたるをハ心こころある事ことの」いみしくあり
かたきとこそハ人も申す事」なれハそれにつけてほかをかきりて人にいミ」しかられ
んとおもふ人のあらんもかたかるへくも「五二・ウ」なしまして世をすてたる人なん
とにむかひてハ」さなからん心をもあはれをしりほかにあひし」らハんために後世ごせの
おそろしさこの世よのいとハ」しさなんとは申すへきそかし又か様やうに申せハ」ひとへに

この世の人めはいかにもありなんとて人の「そしりをもかへりみすほかをかさらね」と□「心のまゝにふるまふかよきと申すにてハなき也」「五三・オ」菩薩の譏嫌戒とて人のそしりになりぬへき」事をハなせそとこそいましめられたれこ」れハほうにまかせてふるまえハ放逸とてわろ」き事にてあるなりそれに時にのそミたる」譏嫌戒のためはかりにいさゝか人めをつゝむか」たハわざともさこそあるへき事を人目をのミ」執してま事のかたをもかへりみす往生のさ「五三・ウ」ハリになるまでにひきなさるゝ、事の返／＼も」くちおしき也譏嫌戒となつてやかて虚假」になる事もありぬへし眞實といひなして」あまり放逸なる事もありぬへしこれをかま」えて／＼よく／＼心えとくへし詞なをたらぬ心ち」する也又この眞實につきて自利の眞實利他」の眞實あり又三界六道の自他の依正をい□「五四・オ」ひすて、かろしめいやし□□も阿彌陀佛□」依正二報を禮拜讚嘆憶念せんにもおよそ猷」離穢土欣求淨土の三業にわたりてみな眞實」なるへきむね疏の文につふさ也その文しけく」してこと／＼／＼いたすにあたはず至誠」心のあり」さま略してかくのごとし」

二に深心といハまつ禮讚の文にいはいく二者深心「五四・ウ」すなはち眞實の信心なり自身ハこれ煩惱を」具足せる凡夫なり善根薄少にして三界に」流轉して火宅をいてす」と信知していま彌陀」の本弘誓願の名號を稱する事しも十聲一」聲にいたるまでさ

ためて往生する事をうと」信知して乃至一念もうたかふ心ある事なかれ」かるかゆえ
 に深心となつくと□へりつきに觀經□「五五・オ」疏の文にはく二□□□□□□□□
 □「なはちこれ深」信の心なり又二種あり一にハ決定してふかく」自身ハ現にこれ罪
 惡生死の凡夫なり曠劫より」このかた常沒流轉して出離の縁ある事なし」と信せ
 よ二にハ決定してふかくかの阿彌陀佛」の四十八願をもて衆生を攝受し給ふ事う」
 たかひなくおもんハかりなくかの願力に乘し「五五・ウ」てさためて往生する事を
 うと信し又決定し」てふかく釋迦佛この觀經の三福九品定散二善」をときてかの
 ほとけの依正二報を證讚して人を」して欣慕せしめ給ふ事を信し又決定し」てふ
 かく彌陀經のなかに十方恆沙の諸佛の」一切の凡夫決定してむまる、事をうと證
 勸し給へりねかはくハ一切の行者一心にた、佛「五六・オ」語を信して身命をか
 へりみす決定してより」行してほとけのすてしめ給はん事をハすなハ□」すてほと
 けの行せしめ給はん事をハすなハち行」しほとけのさらしめ給はんところをハすなハ
 ち」されこれを佛教に隨順し佛意に隨順すと」なつくこれを眞の佛弟子となつく又深
 心を」深信といハ決定して自心を建立して教に順し「五六・ウ」て修行してなかく
 疑錯をのそきて一切の別解」別行異學異見異執のために退失し傾動せ」られされと
 いへりわたくしにこの二つの釋を見る」に文に廣略あり言ハに同異ありといへとも

はじめには我が身の程を信じ、後には仏の願を信ず

まつ「二種の信心をたつる事ハそのおもむきこれひと」つなりすなはち二の信心といハはじめにわか身□「煩惱罪惡の凡夫なり火宅をいてす出離の縁「五七・オ」なしと信せよといひつきにハ決定往生すへき」身なりと信して一念もうたかふへからず人にも「いひさまたけらるへからすなんといへる前後のことは」相違して心えかたきに、たれとも心をと、めて「これを案するにはしめにハわか身のほとを信じ」のちにハほとけの願を信する也た、しのちの信「心を決定せしめんかためにはしめの信心をは「五七・ウ」あくる也そのゆへハもしはしめのわか身を信する」様をあけすしてた、ちにのちのほとけのちかひ」ハかりを信すへきむねをいたしたらましかハ」もろくくの往生をねかはん人雜行を修して本願をたのまさらんをはしハらくおくまきしく彌陀の本願の念佛を修しなからもなを心にもし」貪欲瞋恚の煩惱をもおこし身におのつから「五八・オ」十惡破戒等の罪業をもおかす事あらハミタ」りに自身を怯弱して返りて本願を疑惑し」なましまことにこの彌陀の本願に十聲一聲にいたるまで往生すといふ事ハおほろけの人にて」ハあらし妄念をもおこさすつミをもつくらぬ人の甚深のさとりをおこし強盛の心をもち」て申したる念佛にてそあるらんわれらことき「五八・ウ」のえせものともの一念十聲にてハよもあらしと」こそおほえんもにくからぬ事也これハ善導和」尙ハ未來の衆生のこのうたかひをおこさん事」を

かへりみてこの二種の信心をあけてわれら」かことき煩惱をも断せず罪惡をもつくれ
る」凡夫なりともふかく彌陀の本願を信して」念佛すれ八十聲一聲にいたるまで決
定して「五九・オ」往生するむねをハ釋し給へる也かくたに□し」給ハさらましかハ
われらか往生ハ不定にそお□へ」ましあやうくおほゆるにつけてもこの釋のことに
心にそみておほへはんへる也されハこの義を心えわかぬ人にこそあるめれほとけの
本願をハうたかはねともわか心のわろけれハ往生ハ」かなハしと申あひたるかやか
て本願をうた「五九・ウ」かふにて侍る也さやうに申したちなはいかほ」とまてかほ
とけの本願にかなはずさほと心の心こそ」本願にハかなひたれとはしり侍るへきそれを
わ」きまえさらんにとりてハ煩惱を断せさらんほとは」心のわろさハつきせぬ事にて
こそあらんすれハ」いまハ往生してんとおもひたつ世ハあるまし」又煩惱を断してそ
往生ハすへきと申すになり「六〇・オ」なハ凡夫の往生といふ事ハミなやふれなん
すすてに」彌陀の本願力といふとも煩惱罪惡の凡夫をハ」いかてかたすけ給ふへき
えむかへ給ハし物をなん」と申すになるそかしほとけの御ちからをは」いかほと、し
るそそれにすきてほとけの願をう」たかふ事ハいか、あるへき又ほとけにたちあひ
ま」いらするとかありなんと申すへき事にてこそ「六〇・ウ」あれすへてわか心の善
惡をはからひてほとけの願にかなひかなハさるを心えあはせん事ハ佛智な」らてハ

かなふましき事也されハ善導ハ觀經の疏の一のまきに弘願を釋するに一切善惡の凡夫むまる、事をうる事は阿彌陀佛の大願業力に乗して増上縁とせずといふ事なしと「いひおきてほとけの密意弘深にして教門さ「六一・オ」とりかたし三賢十聖□はかりてうか、ふところ」にあらすいはんやわれ信外の輕毛なりあえて「旨趣をしらんやとこそハ釋し給ひたれハ善導たにも十信にたにもいたらぬ身にていか」てかほとけの御心をしるへきとこそハおほせられ「たれはましてわれらかさとりにてほとけの」本願はからひしる事ハゆめくおもひよるま「六一・ウ」しき事也た、心の善惡をもかへりみす罪の輕重をもわきまへす心に往生せんとおもひて」口に南無阿彌陀佛となえはこゑについて「決定往生のおもひをなすへしその決定に」よりてすなハち往生の業ハさたまる也かく心え「つれハやすき也往生ハ不定におもへハやかて」不定也一定とおもへハやかて一定する事なり「六二・オ」所詮ハ深信といハかのほとけの本願ハいかなる罪人をもすてすた、名號をとなふる事一聲まで決定して往生すとふかくたのミてすこしのうたかひもなきを申す也觀經の下品下生を見るに十惡五逆の罪人も一念十念に往生すと、かれたり十惡五逆等貪瞋四重偷僧謗正法未曾慚愧悔前愆といへるハ在生「六二・ウ」の時の惡業をあかす忽遇往生善知識急勸專稱彼佛名化佛菩薩尋聲到一念傾心入寶蓮といへるは臨

三宝滅尽の後の
衆生も往生

みだりに本願を
疑うことなかれ

終しゆの時の行ぎやう相さうをあかす也」又雙卷經のおくに三寶滅盡ほうめつしんののちの衆生しゆしやう乃なり「至一念ねんに往生わうしやうすと、かれたり善導ぜんたう釋しやくして」いはく萬年ねん三寶滅ほうめつし此經きぎやう住ぢゆう百年爾時ねんにし聞もん一念ねん皆かい」當得たうとく生しやうひ彼かといへりこの二つの心こころをもて彌陀みたの「六三・オ」本願ほんくわんのひろく攝せつしとをくおよふほとをハし」るへき也おもきをあげてかろきをおさめ惡あく」人をあげて善人ぜんじんをおさめとをきをあげて「ちかきをおさめのちをあげてさきをおさむる」なるへしま事に大悲だいひ誓願せいくわんの深廣しんくわうなる事こと「たやすく詞ことばをもてのふへからす心こころをと、め」ておもふへきなりそもくこのころ末法まつぽうにいれ「六三・ウ」りといへともいまた百年ねんにみたすわれら罪業ざいごう」おもしといへともいまた五逆ぎやくをつくらすしかれハ」はるかに百年法滅ねんぽうめつの、ちをすくひ給へりいはん」やこのころをやひろく五逆ぎやく極重ごくぢゆうのつミをす」て給ハすいはんやわれらをやた、三心さんしんを具くし」てもはら名號なごうを稱しょうすへしたとひ一念ねんと」いふともみたりに本願ほんくわんをうたかふ事なかれ「六四・オ」た、しかやうのことハりを申つれハつミをもす」て給ハねハ心こころにまかせてつミをつくらんもく」るしかるまし又一念ねんにも一定ちやう往生わうしやうすなれば」念佛ねんぶつハおほく申さすともありなんとあしく」心うる人のいてきてつミをハゆるし念佛ねんぶつをハ」制せいするやうに申しなすか返かへくもあさまし」く候也あき惡あくをす、め善ぜんをと、むる佛法ふつぽうハいか、「六四・ウ」あるへきされハ善導ぜんたうは貪瞋煩惱とんしんぼんなんをきたしましへされといましめ又念々ねんくさう相續さうぞくしていのちの」おはらんを期ことせよとおしへ又日所作にっしよさ

八五萬六」萬乃至十萬なんとこそす、め給ひたれた、こ」れハ大悲本願の一切を攝す

るなを十惡五逆を」ももらさす稱名念佛の餘行にすくれたる」すてに一念十念にあ

らはれたるむねを信せ「六五・オ」よと申すにてこそ□□□□の事ハあしく」心う

れハいつかたもひか事になる也つよく信」するかたをす、むれハ邪見をおこし邪見

を」おこさせしとこしらふれば信心つよからす」なるか術なき事にて待る也かやうの

分別」ハこのついでに事なかければ起行の下たに」こまかに申ひらくへし又ひくと

ころの疏の「六五・ウ」文を見るにのちの信心について二つの心あり」すなハちほと

けについてふかく信し經についてふかく信すへきむねを釋し給へるにやと」心えら

る、也まつほとけについて信すといハ一」にハ彌陀の本願を信し二にハ釋迦の所説を

信」し三にハ十方恆沙の護勸を信すへき也經に」ついて信すといハ一にハ無量壽經

を信し二にハ「六六・オ」觀經を信し三にハ阿彌陀經を信する也すなハ」ちはしめ

に決定してふかく阿彌陀佛の四十」八願といへる文ハ彌陀を信し又無量壽經を信

する也つきに又決定してふかく釋迦佛の觀」經といえる文ハ釋迦を信し觀經を信す

るなり」つきに決定してふかく彌陀經の中といへる」文ハ十方諸佛を信し又阿彌陀經

を信する也「六六・ウ」又つきの文にほとけのすてしめ給はんをハすて」よといふハ

雜修雜行なりほとけの行せしめ給」はん事をハ行せ□といふハ專修正行也ほとけ

仏について信じ
法について信ず

雜修雜行と專修
正行

別解別行の人に
破られざれ

人に就きて信を
立つ―四重破人

の「さらしめ給はん事をハされといふハ異學異解雜」緣亂動のところ也善導のみつかもさへ他の「往生の正行をもさふと釋し給へる事まことに」おそるへき物也佛教に隨順すといハ釋迦の御「六七・オ」おしへにしたかひ佛願に隨順すといハ彌陀の願にしたかふ也佛意に隨順すといハ二尊の「御心」御心になふ也いまの文の心ハさきの文に三部「經を信すへしといへるにたかはす詮してハた、」雜修をすて、專修を行するかほとけの御心に「かなふとこそハきこへたれ又つきの文に別解」別行のためにやふられされといふハさとりこと「六七・ウ」に行ことならん人の難しやふらんについて念佛」をもすて往生をもうたかふ事なかれと申す」也さとりことなる人と申すハ天台法相等の「諸宗の學生これなり行ことなる人と申すハ」眞言止觀等の一切の行者これなりこれらは「ミナ聖道門の解行也淨土門の解行にことなるかゆへに別解別行とはなつてたりかくのこ「六八・オ」ときの人にいひやふらるましきことハリハこの「文のつきにこまかに釋し給へりすなハち人に」つきて信をたつ行につきて信をたつと」いふ二の信をあけたりはしめの人に「つきて信」をたつといへるこれなりその文廣博にして「つふさにいたすにあたはずその義至要にして」さらにすてかたきによりてことはを略し心を「六八・ウ」とりてそのおもむきをあかさハ文の心解行不同」の人ありて經論の證據をひきて一切の凡夫」往生することをえすといハすな

ハちこたえて「いへなんちかひくところの經論を信せざるには」あらずミなこと
くくあふいて信すといへともさら」になんちか破をハうけすそのゆへハなんちかひ
く」ところの經論とわか信するところの經論とす「六九・オ」てに各別の法門なり
ほとけこの觀經彌陀經等をとき給ふ事時も別にところも別に對機も別に利益も
別なりほとけの説教ハ機にし」たかひ時にしたかひて不同なりかれにハ」通して人天
菩薩の解行をとくこれハ別して」往生淨土の解行をとくすなハちほとけの滅後」の
五濁極増の一切の凡夫決定して往生す「六九・ウ」る事をうととき給へりわれいま
一心にこの佛」教によりて決定して奉行すたとひなんち」百千萬億むまれすといふと
もた、わか往生の」信心を増長し成就せんとこたへよといへり又」行者さらに難破
の人にむかひてときていへなん」ちよくきかれいまなんちかためにさらに」決定の
信の相をとかんといひてはしめは地「七〇・オ」前菩薩羅漢辟支佛等よりおハリ化
佛報佛」またたてあけてたとひ化佛報佛十方にみ」ちミちておのく、ひかりをか、や
かしたをいた」して十方におほひて一切の凡夫念佛して」定往生すといふ事ハ
ひか事なり信すへからす」との給ハんにわれこれらの諸佛の所説をきくと」も一念も
疑退の心をおこしてかのくに、むま「七〇・ウ」る、事をえさらん事をおそれしなに
をもて」のゆへにとならは一佛ハ一切佛也大悲等同にして」すこしきの差別なし同體

弥陀如来

釈迦如来

十方諸仏

の大悲のゆえに一佛ふつの所説しよせつハすなハちこれ一切佛さいふつの化くまなりこ、をもて」まつ彌陀如みたよ來稱らいしやう我名みやう號下かうげ至し十聲じしやう若じやく不ふ生しやう者しや」不取正覺ふしゆじやくと願くわんしてその願成くわんしやう就しゆしてすてに佛ふつに「なり給へり又釋迦しやくか如来にくよらいハこの五濁ちよくあくせ惡世あくせにして「七一・オ」惡衆生あくしゆしやう惡見あつげん惡煩惱あくほんなう惡邪無信しやむしんさかりなる時とき」彌陀みたの名號みやうごうをほめ衆生しゆじやうを勸勵くわんれいして稱念せうねんす」れハかならず往生わうじやうする事をうと、き給へり又十じゆ」方の諸佛しよふつハ衆生の釋迦しゆしやう一佛ふつの所説しよせつを信しんせさ」らん事をおそれてすなハちともに同心同時とうしんどうしに「おのく舌相せつさうをいたしてあまねく三千世界せんせにおほ」ひて誠實しやうじつのことはをとき給ふんたち衆生しゆしやうミナ「七一・ウ」釋迦しやくかの所説しよせつ所讚しよたんを信しんすへし一切さいの凡夫罪ほんふざい」福ふくの多少たせう時節せつの久近くこんをとハすた、よく上か□ハ百ひやく」年ねんをつくし下しもハ一日七十聲じちじゆ一聲しやうにいたるまで」心をひとつにしてもはら彌陀みたの名號みやうごうを念ねんすれ」ハさためて往生わうじやうする事をうといふ事を信しんす」へしかならずうたかふ事なかれと證誠しやうじやう給へり」かるかゆへに人にんについて信しんをたつといへりかくのこと「七二・オ」きの一切諸佛しよふつの一佛ふつものこ□す同心どうしんにあるいハ願くわん」をおこしあるいハその願くわんをときあるいハその説せつを證しよ」して一切さいの凡夫念佛ほんふねんぶつして決定けつぢやう往生わうじやうすへきむねを」す、め給へるうゑにハいかなるほとけの又きたりて」往生わうじやうすへからすとはの給ふへきそといふことハりを」もてほとけきたりての給ふともおとろくへからす」とは信しんする也ほとけなをしかりいはんや地前ちぜん地「七二・ウ」上じやうの菩薩ぼさつをやいはんや小乘せうじやうの羅漢らかんをやと心こころえ

疑いを除くを信
という

つ「れはまして凡夫のとかく申さんによりて一念」もうたかひおとろく心あるへから
すとハ申す也」おほかたこの信心の様を人の心えわかぬとおほゆ」る也心のそミく
と身のけもいよたちなミたも」おつるをのミ信のおこると申すハひか事にて」ある也
それハ歡喜隨悲喜□□申へき信といハ「七三・オ」うたかひに對する心□□うた
かひをのそくを信」とハ申すへき也見る事につけてもきく事に」つけてもその事一
定さそとおもひとりつる事」ハ人いかに申せとも不定におもひなる事ハなきそ」かし
これをこそ物を信するとハ申せその信の」うゑに歡喜隨喜なんともおこらんハすく
れたるに」てこそあるへかれたとへハとしころ心のほとをも「七三・ウ」みとりてそ
ら事せぬたしかならん人そとたの」ミたらん人のさまくにおそろしき誓言をたて」
なをさりならすねんころにちきりをきたる」事のあらんをふかくたのミてわすれすた
もちて」心のそこにふかくたくわえたらんにいと心の程」もしらさらん人のそれなた
のミそそら事をす」るそとさまくにいひさまたけんにつきてすこし「七四・オ」も
かはる心ハあるましきそかしそれかやうに」彌陀の本願をもふかく信していひやふら
るへか」らすいはんや一代の教主も付囑し給へるをや」いはんや十方の諸佛も證誠
し給へるをやと心」うへきにやまことにことほりをき、ひらかさらん」ほとこそあら
めひとたひもこれをき、て信をお」こしてんのちハいかなる人とかくいふともなし

行に就いて信を
立つ

道光の註記

「七四・ウ」にかハみたる、心あるへきところはおほへ候へ」

つきに行について信をたつといふハすなはち」行に二つあり一にハ正行二にハ雜
行なりといへ」りこの二行についてあるいは行相あるいは得失」文ひろく義おほし
といへともしはらく略を存」すつふさにハ下もの起行のなかにあかすへし」深心の大
要をとるにこれに□□

「七五・オ」この文に下卷あるへしと見ゆるかいつ」くにかくれて侍るにかいまたた
つねえ」すもしたつねうる人あらハこれにつけ」

くろたにのしやうにんことうろくくわんたい
黒谷上人語燈録卷第十一

〔一・オ〕

黒谷上人語燈錄卷第十二

欣淨沙門了惠集錄

和語第二之二當卷 有五篇

念佛往生 要義抄第四

三心義第五

七箇條 起請 文第六

念佛 大意第七

〔一・ウ〕

淨土宗略抄第八

念佛往生要義抄 第四

源空作

十惡五逆をえらばず

それ念佛往生八十惡五逆をえらばず迎攝するに十聲一聲をもてす聖道諸宗の成佛八上根上智をもととするゆへに聲聞菩薩を機とすしかるに世すてに末法になり人ミな惡人なりはやく修しかたき教を學〔一・オ〕せんよりハ行しやすき彌陀の名號をとなへてこのたひ生死の家をいつへき也たしいつれの經論も釋尊のと

他力の念仏は往生す
他力とは

きおき給へる經教なりしか」れハ法花涅槃等の大乘經を修行してほとけ」になるに
なにかたき事かあらんそれにと」りていますこし法花經ハ三世の諸佛もこの」經に
よりてほとけになり十方の如來もこの經「二・ウ」によりて正覺をなり給ふしかる
に法花經」なんとをよみたてまつらんになにの不足かあ」らんかやうに申す日ハまこ
とにさるへき事な」れともわれらか器量ハこの教におよはさるなり」そのゆえハ法花
にハ菩薩聲聞を機とするゆへ」にわれら凡夫はかなふへからすとおもふへき」也し
かるに阿彌陀ほとけの本願ハ末代のわれ「三・オ」らかたぬにおこし給へる願なれハ
利益いまの時」に決定往生すへき也わか身ハ女人なれハとおもふ」事なくわか身ハ
煩惱惡業の身なれハといふ事」なかれもとより阿彌陀佛ハ罪惡深重の衆生」の三世の
諸佛も十方の如來もすてさせ給ひ」たるわれらをむかえんとちかひ給ひける願」にあ
ひたてまつれり往生うたかひなしと「三・ウ」ふかくおもひいれて南無阿彌陀佛く
と申せハ」善人も惡人も男子も女人も十人ハ十人ながら」百人ハ百人ながらミな往
生をとくる也」

問ていはく稱名念佛申す人ハミな往生すへ」しや答ていはく他力の念佛ハ往生す
へし」自力の念佛ハまたく往生すへからす」

問ていはくその他力の様いかむ答ていはく「四・オ」た、ひとすちにわか身の善惡

をかえりみす決定^{けつちやう} 往生^{わうしやう}せんとおもひて申^{まを}すを他力^{たうりき}の念仏^{ねんぶつ}といふ」たとへハ麒麟^{きりん}の尾^をにつきたる蠅^へのひとはねに干^{せん}」里^りをかけり輪王^{りんわう}の御^みゆきにあひぬる卑夫^{ひふ}の「一日^{いちにち}に四^よ天下^{てんか}をめくるかことしこれを他力^{たうりき}と」申^{まを}す也又おほきなる石^{いし}をふねにいれつれば」時^{とき}のほとにむかひのきしにとつくかことし「四・ウ」またくこれハ石^{いし}のちからにハあらすふねのちか」らなりそれかやうにわれらちからにてハな」し阿彌陀^{あみだ}ほとけの御^みちから也これすなハち他^た」力^{りき}なり」

三 問^{もん}ていはく自力^{しりき}といふハいかん 答^{こた}ていはく「煩惱^{ぼんなん}具足^{ぐそく}してわろき身^みをもて煩惱^{ぼんなん}を斷^{たん}し」さとりをあらハして成^{じやうふつ}佛^{ぶつ}すと心^{こころ}えて晝夜^{ちゆうや}「五・オ」にはけめとも無始^{むし}より貪瞋^{とんしん}具足^{ぐそく}の身^みなるか」ゆえになかく煩惱^{ぼんなん}を斷^{たん}する事^{こと}かたきなり」かく斷^{たん}しかたき無明^{むみやう}煩惱^{ぼんなん}を三毒^{さんとく}具足^{ぐそく}の心^{こころ}にて斷^{たん}せんとする事^{こと}たとへハ須彌^{しゆみ}を針^{はり}にてく」たき大海^{たいかい}を芥子^{けし}のひさくにてく」ことしたとひはりにて須彌^{しゆみ}をくたき芥子^{けし}」のひさくにて大海^{たいかい}をく」つくとともわれらか「五・ウ」惡業^{あくごう}煩惱^{ぼんなん}の心^{こころ}にてハ曠劫^{くわうこつ}多生^{たじやう}をふともほとけ」にならん事^{こと}かたしそのゆえは念々^{ねんくふ}歩々^{ふふ}に」おもひと思ふ事^{こと}ハ三途^{さんず}八難^{はつなん}の業^{ごう}ねてもさめ」ても案^{あん}しと案^{あん}する事^{こと}ハ六趣^{りくしゆ}四生^{しじやう}のきつな」也かゝる身^みにてハいかてか修行^{しゆぎやう}學道^{がくたう}をして成^{じやう}」佛^{ぶつ}ハすへきやこれを自力^{しりき}とハ申^{まを}す也」

問^{もん}ていはく聖^{しやうにん}人の申^{まを}す念佛^{ねんぶつ}と在家^{さいけ}のもの、「六・オ」申^{まを}す念佛^{ねんぶつ}と勝劣^{しやうれつ}いかむ答^{こた}て

いはく「聖人」の念佛と世間者の念佛と功德ひとしくしてまゝ、たくかわりめあるへからず」

疑ていはくこの條なを不審也そのゆへハ女人に「もちかつかす不淨の食もせずして申さん念」佛ハたとかるへし朝夕に女境にむつれ酒を」のミ不淨食をして申さん念佛ハさためておと「六・ウ」るへし功德いかてかひとしかるへきや」

答ていはく功德ひとしくして勝劣あるへから」すそのゆへハ阿弥陀佛の本願のゆえをしら」ざるもの、かゝるおかしきうたかひをハする也」しかるゆえはむかし阿弥陀佛二百一十億の諸佛の淨土の莊嚴寶樂等の誓願利益にい」たるまで世自在王佛の御まへにしてこれを見「七・オ」給ふにわれらこときの妄想顛倒の凡夫のむ」まへき事のなき也されは善導和尚釋して「いはく一切佛土皆嚴淨凡夫亂想恐難生」とい」へりこの文の心は一切の佛土ハたえなれとも亂」想の凡夫ハむまる、事なしと釋し給ふ也」おのくの御身をはからひて御らんすへきなり」そのゆへハ口にハ經をよミ身にハ佛を禮拜すれ「七・ウ」とも心にハ思ハし事のミおもはれて一時もと、「まる事なししかれハわれらか身をもていかてか」生死をはなるへきか、りける時に曠劫よりこ」のかた三途八難をすミかとして洞燃猛火に」身をこかしていつる期なかりける也かなし」きかなや善心ハとしくにしたかひてうすく」なり惡心ハ日、にし

煩惱は身にそえる影
菩提は水にうかべる月

心の澄む時の念
仏と妄心の念
心の功徳に差別なし

たかひていよ／＼まさるさ「八・オ」れハ古人のいへる事あり煩惱ハ身にそへる影さ
ら」むとすれともさらす菩提ハ水にうかへる月とら」むとすれともとられすとこのゆ
へに阿彌陀ほと」け五劫に思惟してたて給ひし深重の本」願と申すハ善惡をへたてす
持戒破戒をきら」はす在家出家をもえらはす有智無智をも」論せず平等の大悲をお
こしてほとけになり「八・ウ」給ひたれハた、他力の心に住して念佛申さは」一念須
臬のあひたに阿彌陀ほとけの來迎に」あつかるへき也むまれてよりこのかた女人を」
目に見す酒肉五辛なく斷して五戒十戒」等かたたくもちてやん事なき聖人も自力
の」心に住して念佛申さんにおきてハ佛の來迎」にあつからん事千人か一人萬人か一
二人なんと「九・オ」や候はんすらんそれも善導和尚ハ千中無一」とおほせられて候
へハいか、あるへく候らんとおほ」へ候およそ阿彌陀佛の本願と申す事ハやう」もな
くわか心をすませとにもあらず不淨の」身をきよめよとにもあらずた、ねてもさめ」
てもひとすちに御名をとなふる人をハ臨終に」ハかならずきたりてむかへ給ふなるも
のをと「九・ウ」いふ心に住して申せハ一期のおハりにハ佛の來迎」にあつからん事
うたかひあるへからすわか身は」女人なれハ又在家のものなれハといふ事なく」往
生ハ一定とおほしめすへき也」
問ていはく心のすむ時の念佛と妄心の中の念佛」とその勝劣いかむ 答ていはくそ

の功德くどくひ」としくしてあえて差別しやべつなし

「一〇・オ」

疑うたかていはくこの條てうなを不審ふしんなりそのゆへハ心の「すむ時の念佛ねんぶつハ餘念よねんもなく一向かうこう極ごく樂世界らくせかいの事」のミおもはれ彌陀みだの本願ほんがんのミ案あんせらるゝかゆへに「ましふるものなけれハ清淨しやうくの念佛ねんぶつなり心の」散亂さんらんする時は三業さんごう不調ふてうにして口にハ名號みやうかうをとナ」へ手てにハ念珠ねんじゆをまハすハかりにてハこれ不淨ふじやうの」念佛ねんぶつ也いかてかひとしかるへき

「二〇・ウ」

答こたていはくこのうたかひをなすハいまた本願ほんがんの「ゆへをしらざる也阿彌陀佛あみだぶつハ惡業あくごうの衆生しゆじやうを」すくはんために生しやう死じの大海たいかいに弘誓くせいのふねを」うかへ給たまへる也たとへハふねにおもき石いしかろきあき」からをひとつふねにいられてむかひのきしに」とつくかことし本願ほんがんの殊勝しゆしやうなることはいかなる」衆生しゆじやうもた、名號みやうかうをとなふるほかハ別べつの事なき也

「二一・オ」

一声の念仏と十
声の念仏の功德
に勝劣なし

問とふていはく一聲しやうの念佛ねんぶつと十聲しやうの念佛ねんぶつと功德くどくの「勝劣しやうれついかむ答こたていはくた、おなし事こと也」

疑うたかていはくこの事又不審ふしんなりそのゆへハ一聲しやう「十」聲しやうすてにかすの多少たせうありいかてかひとしかる」へきや答こたこのうたかひハ一聲しやう「十聲しやうと申まをす」事ことハ最後さいごの時の事ことなり死しす

平生の念仏と臨終の念仏の功德にかわりめなし

る時一聲申す」ものも往生す十聲申すものも往生すといふ「二一・ウ」事なり往生

たにもひとしくハ功德なんそ劣」ならん本願の文に設我得佛一十方衆生至一

心」信樂欲レ生二我國一乃至十念若不レ生一者不レ取二正一覺この文の心は法藏

比丘われほとけになり」たらん時十方の衆生極樂に生まれんとおも」ひて南無阿彌

陀佛ともし八十聲もしハ一聲申さん衆生をむかへすハほとけにならしと「二一・

オ」ちかひ給ふかるかゆへにかすの多少を論せず往生」の得分ハおなしき也本願の

文顯然なりなん」そうたかはんや」

問ていはく最後の念佛と平生の念佛といつれ」かすくれたるや答ていはくた、おな

し事」也そのゆへハ平生の念佛臨終の念佛とてなんの」かはりめかあらん平生の念佛

の死ぬれハ臨終「二一・ウ」の念佛となり臨終の念佛ののふれハ平生の」念佛となる

也」

難していはく最後の一念ハ百年の業にすくれ」たりと見えたりいかむ答ていはくこ

のう」たかひハこの文をしらざる難なりいきのと、」まる時の一念ハ悪業こはくして

善業にすく」れたり善業こはくして悪業にすくれたり「二三・オ」といふ事也た、し

この申す人は念佛者□□□」なしもとより悪人の沙汰をいふ□也平生」より念佛申し

て往生をねかふ人の事をは」ともかくもさらに沙汰におよはぬ事也」

撰取の益は平生の時なり

問ていはく攝取の益をかうふる事ハ平生か」臨終かいかむ答ていはく平生の時なり」そのゆへハ往生の心ま事にてわか身をうたかふ「二三・ウ」事なくて來迎をまつ人ハこれ三心具足の」念佛申す人なりこの三心具足しぬれハかな」らす極樂にうまるといふ事ハ觀經の説なり」かゝる心さしある人を阿彌陀佛は八萬四千の」光明をはなちててらし給ふ也平生の時て」らしはしめて最後まですて給ハぬなり」かるかゆへに不捨の誓約と申す也

「二四・オ」

智者の念仏と愚者の念仏の功德に差別なし

問ていはく智者の念佛と愚者の念佛□□□」れも差別なしや答ていはくほとけの本」願にとつかハすこしの差別もなしそのゆへ」は阿彌陀佛ほとけになり給ハさりしむかし」十方の衆生わか名をとなへハ乃至十聲までも」むかへむとちかひをたて給ひけるハ智者を」えらひ愚者をすてんとにハあらずされハ五會法「二四・ウ」事讚にハく不簡二多聞持淨戒一不簡二破戒 罪根」深一但使迴心 多念一佛能令二瓦礫 變成二金」この文の」心ハ智者も愚者も持戒も破戒もた、念佛申」さはミな往生すといふ事也この心に住してわか」身の善惡をかえりみすほとけの本願をたの」ミて念佛申すへき也このたひ輪廻のきつな」をはなる、事念佛に□きたる事ハあるへか□「一五・オ」このかきおきたるものを見てそしり謗せん」ともからハかならず九品

輪廻のきつなを離れる念仏

往生の機（人）
と往生の行
五障三従

のうてなに縁をむすひ」たかひに順逆の縁むなしからずして一佛「淨土のともたらむ」

そもく機をいへハ五逆重罪をえらはす女人闍提をもすてす行をいへハ一念十念をもてす」これにて五障三従をうらむへからすこの願「二五・ウ」をたのミこの行をはけむへき也念佛のちから」にあらすは善人なをむまれかたしいはんや」悪人をや五念に五障を消し三念に三従を」滅して一念に臨終の來迎をかうふらんと行」住坐臥に名號をとなふへし時處諸縁にこの」願をたのむへしあなかしこく」

南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

「二六・オ」

三心義 第五

觀無量壽經には若く有衆生願生彼國發三心種心即便往生何等爲三者至誠心二心者」深心三者迴向發願心具三心者必生彼國」といへり禮讚にハ三心を釋しおハりて具三心」者必得往生也若く少一心即不得生といへりし」かれハ三心を具すへきなり一

至誠心とは

に至誠心といふは「二六・ウ」眞實の心なり身に禮拜を行しくち□□號を」となへ心」に相好をおもふミナ眞實をもちるよすへ」てこれをいふに穢土をいとひ淨土をね□ひても」ろくの行業を修せんものミナ眞實をもてつ」とむへしこれを勤修せん

にほかにハ賢善精□□の「相を現しうちにハ愚惡懈怠の心をいたきて修」するところの行業ハ日夜十二時にひまな□「二七・オ」□れ□行□□も往生をえすほかにハ愚惡懈怠のかたちをあらはしてうちにハ賢善精進の「おもひに住してこれを修行するもの一時一念」なり□もその行むなしからすかならず往「生をうこれを至誠心となつて二に深心といふ」□ふかく信する心なりこれについて二あり一「にハわれハこれ罪惡不善の身無始よりこのかた「二七・ウ」六道に輪廻して往生の縁なしと信し二には「罪人なりといへともほとけの願力をもて強縁と」してかならず往生をえん事うたかひなく」うらもひなしと信すこれについて又二あり一にハ人につきて信をたつ二にハ行につきて「信をたつ人につきて信をたつといふハ出離生」死のみ□□ほしといへとも大きにわかちて二あり「二八・オ」一にハ聖道門二にハ浄土門なり聖道門といふは「この娑婆世界にて煩惱を斷し菩提を證する」みちなり浄土門といふハこの娑婆世界をいとひ「かの極樂をねかひて善根を修する門なり」二門ありといへとも聖道門をさしおきて浄土門に歸すしかるにもし人ありておほく經論をひきて罪惡の凡夫往生する事をえしと「二八・ウ」いはんこのことはをき、て退心をなさないよく信「心をますへしゆへいかなとなれハ罪障の凡夫の」浄土に往生すといふ事ハこれ釋尊の誠言なり「凡夫の妄執にあらずわれすてに佛の言を信」してふか

く淨土を欣求すたとひ諸佛菩薩しよふつほさつきたりて罪障ざいしやうの凡夫淨土ほんふしやうとにむまるへからすと」の

給ふともこれを信すへからすゆへいかなとなれ「二九・オ」ハ菩薩ほさつハ佛ほとけの弟子なりも

しま事にこれ菩薩ほさつならハ佛説ふつせつをそむくへからすしかるにすてに佛ふつ説せつに□□ひて往

生しやうをえすとの給ふま事の菩ほ薩さつにあらす又佛ほとけハこれ同體どうたいの大悲ひなりま事に佛ほとけならハ

釋迦しやかの説せつにたかふへからすしかれハすなハち阿彌陀經あみたきやうに一日七日彌陀みだの名號みやうかうを念

して「かならずむまる、事をうととけりこれを六方ろくほう「二九・ウ」恆沙こうしやの諸佛釋迦佛しよふつしやかほとけに

おなしくこれを證誠しやうしやうし給くへりしかるにいま釋迦しやかの説せつをそむきて往生わうしやうせすといふ

かるかゆへにしりぬま事のほとけに「あらすこれ天魔てんまの變化へんげなりこの義ぎをもて」のゆ

へに佛菩薩ふつほさつの説せつなりとも信すへからす「いかにいはんや餘説よのせつをやなんちか執しつするとこ

ろ」の大小たいせうことなりといへともミな佛果ぶつくわを期こす□「二〇・オ」穢土えいとの修行しゆぎやう聖道門しやうだうもんの

心こころなりわれらか修しゆすると「ころハ正雜しやうざう不同ふたうなれともとに極樂ごくらくをねかふ」往生わうしやうの行

業ごうハ淨土門しやうともんの心こころなり聖道門しやうだうもんハこれ汝にちか有緣うえんの行淨土門きやうしやうともんといふハわれらか有緣うえん

の行ぎやうこれをもてかれを難なんすへからすかれをもてこれこれを難なんすへからすかくのことく

信しんするものをは「就人立信しゆにんりつしんとなつくつきに行ぎやうにつきて信しんをたつ「二〇・ウ」といふハ

往生わうしやう極樂ごくらくの行ぎやうまちくなりといへとも二種しゆしゆをはいてす一しやうぎやうにハ正行しやうぎやう二ざうぎやうにハ雜行ざうぎやう也

正行しやうぎやうといふハ阿彌陀佛あみだぶつにおきてしたしき行ぎやうなり雜行ざうぎやうといふハ阿彌陀佛あみだぶつにおきて

就立立信

正行・雜行

五種正行

正助二業

五番の相對

廻向發願心とは

うとき行なりまつ」正行と□ふハこれにつきて五あり一にハいはく」讀誦いはゆる
 三部經をよむなり二にハ觀察」いはゆる極樂の依正を觀する也三にハ禮拜い
 「二・オ」はゆる阿彌陀佛を禮拜する也四にハ稱名いはゆる彌陀の名號を稱す
 る也五にハ讚嘆供養いはゆる阿彌陀佛を讚嘆し供養する也この五」をもてあはせて
 ふたつ
 二とす一にハ一心にもはら彌陀」の名號を念して行住坐臥に時節の久近をと」はす
 念々にすてざるこれを正定業となつく」かのほとけの願に順するかゆへに二にハ
 さきの五 「二・ウ」か中かの稱名のほかの禮拜讀誦等をみな助業となつくつき
 に雜行といふハさきの五種の正助二業をのそきて已外のもろくの讀誦大乗發
 菩提心持戒勸進等の一切の行なりこの」正助二行につきて五種の得失あり一にハ
 親疎對いはゆる正行ハ阿彌陀佛にしたしく雜行ハうとく二にハ近遠對いはゆる
 正行ハ阿彌陀 「二・オ」佛にちかく雜行ハ阿彌陀佛にとをし三にハ有間無間對
 いはゆる正行ハおもひをかくるに無間也」雜行ハ思をかくるに間斷あり四にハ廻向不
 廻向對いはゆる正行ハ廻向をもちるされともお」のつから往生の業となる雜行ハ廻
 向せざる時ハ」往生の業とならす五にハ純雜對いはゆる正行ハ」純極樂の業也雜
 行ハしからす十方の淨土 「二・ウ」乃至人天の業也かくのことき信するを就行
 立」信となつく三に廻向發願心といふハ過去および」今生の身口意業に修するとこ

ろの一切の善さいぜん」根を眞實しんじつの心しんをもて極樂ごくらくに廻向えんかうして往生わうじやう」を欣求こんくする也これを廻向發願えんかうはつがん心しんとなつくこの「三心さんしんを具くしぬれハかならず往生わうじやうする也」

七箇條しちかてうの起請文きしやうもん 第六

「三三・オ」

淨土宗の大事は
三心の法門にあり
およそ往生わうじやう淨土じゆとの人の要法ようぽうハおほしといへと□□淨土宗の大事ハ三心の法門にある也もし三心さんしん」を具くせざるものハ日夜十二時にちやじふににかふへの火ひをは「らふかごとくにすれともつるに往生わうじやうをえすと」いへり極樂ごくらくをねかはん人ひとハいかにもして三心さんしん」のやうを心こころえて念佛ねんぶつすへき也三心さんしんといふハ一ひとにハ「至誠しじやうしん心しん二ににハ深心しんく三ににハ廻向發願えんかうはつがん心しんなりまつ至し「三三・ウ」誠じやうしん心しんといふハ大師釋たいししやくしての給たまハく至しといふハ眞也しん」誠じやうといふハ實也じつといへりた、眞實心しんじつしんを至誠しじやうしん心しんと善ぜん」導なうハおほせられたる也眞實しんじつといふハもろくの

至誠心

虚假こけの心こころのなきをいふ也虚假こけといふハ貪瞋等とんしんとう」の煩惱ぼんなうをおこして正念しやうねんをうしなふを虚假こけ」心しんと釋しやくする也すへてもろくの煩惱ぼんなうのおこる」事ことハみなもと貪瞋とんしんを母はとして出生しゆつするなり「二四・オ」貪とんといふについて喜足きそく少欲せうよくの貪とんあり不喜足ふきそく」大欲たいよくの貪とんありいま淨土宗じやうとそうに制せいするところは「不喜足ふきそく大欲たいよくの貪とん煩惱ぼんなう也まつ行者ぎやうしやかやうの」道理たうりを心こころえて念佛ねんぶつすへき也これか眞實しんじつの」念佛ねんぶつにてある也喜足きそく少欲せうよくの貪とんハくるし」からす瞋煩惱しんぼんなう

も敬上 慈下の心をやふらす」して道理を心えほとく也癡煩惱といふハおろか「二

四・ウ」なる心也この心をかしこくなすへき也まつ」生死をいとひ淨土をねかひて

往生を大事」といとなみてもろくの作業を事とせされ」は癡煩惱なき也少々癡ハ

往生のさわり」にハならずこれほと心えつれハ貪瞋等の虚」假の心ハうせて眞實心ハ

やすくおこる也これ」を淨土の菩提心といふ也詮するところ生死の「二五・オ」報

をかるしめ念佛の一行をはけむかゆへに」眞實心とハいふなり」

二に深心といふハふかく念佛を信する心なりふか」く念佛を信すといふハ餘行なく一

向に念佛に」なる也もし餘行をかぬれハ深心かけたる行者」といふ也詮するところ

釋迦の淨土三部經は」ひとへに念佛の一行をとくと心え彌陀の四十八「二五・ウ」

願ハ稱名の一行を本願とすと心えてふた心」なく念佛するを深心具足といふなり」

三に廻向發願 心といふハ無始よりこのかたの所」作のまろくの善根をひとへに往

生「極樂と」いのる也又つねに退する事なく念佛するを」廻向發願 心といふなりこれ

ハ惠心の御義なり」この心ならハ至誠心深心具足してのうゑに「二六・オ」つねに

念佛の數遍をすへしもし念佛退」轉せハ廻向發願 心かけたるもの也淨土宗の人ハ」

三心のやうをよくく心えて念佛すへき也三心の」なかにひとつもかけなハ往生ハか

なふましき也」三心具足しぬれハ往生ハ無下にやすくなる也」すへてわれらか輪迴生

深心

廻向發願心

三心具足の念仏

諸仏菩薩諸経を
軽んじ譏ること
なかれ

自力と他力

死しのふるまひハた、貪とん「瞋癡しんちの煩惱ぼんノウの絆ほたしによりて也貪瞋癡とんしんちおこらハ「二六・ウ」な
を惡趣あくしゆへゆくへきまとひのおこりたるぞと」心こころえてこれをと、むへき也しかれともい
また「煩惱ぼんノウ具足のわれらなれハかくハ心こころえたれとも」つねに煩惱ぼんノウハおこる也おこれと
も煩惱ぼんノウをは心こころの「まら人うととし念佛ねんぶつをハ心こころのあるしとしつれハあ」なかに往生わうしやうをハさ
えぬ也煩惱ぼんノウを心こころのあるしと」して念佛ねんぶつを心こころのまら人とする事ハ雜毒虛假ざうどくこけ「二七・オ」
の善ぜんにて往生わうしやうにハきはる、也證せんするところ「前念後念ぜんねんごねんのあひたにハ煩惱ぼんノウをましふと
いふ」ともかまえて南無阿彌陀佛なんぶあみだぶつの六字ろくじのなかに「貪等とんとうの煩惱ぼんノウをおこすましき也」
一ひとつわれハ阿彌陀をこそたのミたれ念佛をこそ」信しんしたれとて諸佛菩薩しよぶつほさつの悲願ひくわんをかし
め「たてまつり法花般若等ほうぎあんにやとうのめてたき經きやう「二七・ウ」ともをわろくおもひそしる事
ハゆめくある」へからすよろつのほとけたちをそしりもろ」もろの聖教しやうけうをうたか
ひそしりたらんする」つミハまつ阿彌陀の御心おんこころにかなふましけ」れハ念佛ねんぶつすとも悲願ひくわん
にもれん事ハ一定也」
一つミをつくらしと身をつ、しんてよからん」とするは阿彌陀ほとけの願くわんをかしむ
るに「二八・オ」てこそあれ又念佛をおほく申さんとて日々に「六萬遍へんなんとをくり
るたるハ他力たりにきをうたかふ」にてこそあれといふ事のおほくきこゆるかやう」のひか事
ゆめくもちふへからすまついつれの」ところにか阿彌陀ハつミつくれとす、め給

自力の念仏

他力の念仏

「ひけるひとへにわか身に悪をもと、めえすつミ」のミつくりたるま、にかゝるゆくゑほとり「二八・ウ」もなき虚言をたくミいたして物もしらぬ男」女のともからをすかしほらかして罪業をす、」め煩惱をおこさしむる事返く天魔のたく」ひ也外道のしわざ也往生極樂のあたかたき」なりとおもふへし又念佛のかすをおほく申」すものを自力をはけむといふ事これ又ものも」おほへすあさましきひか事也た、一念二念「二九・オ」をとなふとも自力の心ならん人ハ自力の念佛と」すへし千遍萬遍をとなふとも百日千日よる」ひるはけミつむともひとへに願力をたのミ」他力をあふきたらん人の念佛は聲々念々しか」しなから他力の念佛にてあるへしされハ三心」をおこしたる人の念佛ハ日々夜々時々剋々に」となふれともしかしなから願力をあふき他力「二九・ウ」をたのミたる心にてとなへるたれハかけても」ふれても自力の念佛とハいふへからす」

三心具足のありさま

本願の三心

一三心と申す事ハしりたる人の念佛に三心」具足してあらん事ハ左右におよハすつやく」三心の名をたにもしらぬ無智のともからの」念佛にハよも三心ハ具し候はし三心かけハ往生」し候なんやと申す事きわめたる不審にて「三〇・オ」候へともこれハ阿彌陀ほとけの法藏菩薩のむかし」五劫のあひたよる心をくたきて案し」たて、成就せさせ給ひたる本願の三心なれ」はあたくしくいふへき事にあらすいかに無

智ならん物もこれを具し三心の名をしらぬ物までもかならずそらに具せんする様

を「つくらせ給ひたる三心なれハ阿彌陀をたのミ「三〇・ウ」たてまつりてすこしも

うたかふ心なくして「この名號をとなふれハあミたほとけかならずわ」れをむかへ

て極樂にゆかせ給ふとき、てこれ」をふかく信してすこしもうたかふ心なくむ」かへ

させ給へとおもひて念佛すれハこの心かす」なはち三心具足の心にてあれハた、ひら

に「信してたにも念佛すれハす、ろに三心ハある「三一・オ」なりされハこそよにあ

さましき一文不通の」ともからのなかにひとすちに念佛するものは「臨終正念にし

てめてたき往生ともをするハ」現に證據あらたなる事なれハつゆちりも」うたかふ

へからすなかよくもしらぬ三心」沙汰してあしさまに心えたる人くハ臨終の」

わろくのミありあひたるハそれにてたれく「三一・ウ」も心うへきなり」

一ときく別時の念佛を修して心をも身をも」はけましと、のへす、むへき也日々

六萬遍を」申せハ七萬遍をとなふれハとてた、あるもいは」れたる事にてハあれとも

人の心さまハいたく目も」なれ耳もなれぬれはいそくとす、む心もな」くあけくれ

ハ心いそかしき様にてのミ疎略に「三一・オ」なりゆく也その心をためなほさん料に

時々」別時の念佛ハすへき也しかれハ善導和尚も」ねんころにす、め給ふ恵心の往

生要集にも」す、めさせ給ひたる也道場をもひきつくろ」ひ花香をもまいらせん事

念仏すれば三心
はあり

別時の念仏

ことにちからのたへ」むにしたかひてかさりまいらせてわか身をもこ」とにきよめて
 道場たうちやうにいりてあるいハ三時しあるいハ「三三・ウ」六時しなんとに念佛すへしもし同行どうぎやう
 んとあまた」あらん時ときハかはるくいりて不斷念佛ふたんだんねんぶつにも修しゆす」へしかやうの事ハおの
 くことからのしたかひて」はからふへしきて善導ぜんたうのおほせられたるハ」月の一日つきひよ
 り八日にいたるまであるいハ八日より十」五日にいたるまであるいハ十五日より廿三
 日にいたるまであるいハ廿三日より晦日つごひにいたるまでと「三三・オ」おほせられた
 りおのくさしあはさらん時ときをは」からひて七日の別時べつじをつねに修しゆすへしゆめく」
 す、ろ事ともいふ物ものにすかされて不善ふぜんの心こころあ」るへからす」
 一いかにもく最後の正念さいごのしょうねんを成誑しやうしゆして目めにハ阿彌陀」ほとけを見たてまつり口くちにハ
 彌陀の名號みだうのなごうをとな」へ心にハ聖衆しやうしゆの來迎らいがうをまちたてまつるへし「三三・ウ」としこ
 ろ日ひころいミしく念佛の功こうをつミたり」とも臨終りんしゆに惡緣あくえんにもあひあしき心こころもおこり」
 ぬるものならば順次しゆんじの往生わうしやうしはつして一生しやう」二生しやうなりとも三生さんしやう四生ししやうなりとも生しやう死しの
 なかれ」にしたかひてくるしからん事ことハくちおしき」事ことをかしされハ善導ぜんたう和尚わうしやうす、め
 ておほせ」られたる様やうハ願くわん弟子等しと臨命りんめい終しゆ時とき乃ない上じやう品ほん往生わうしやう」三四・オ」阿彌陀佛國あみだぶつこくと
 ありいよく臨終りんしゆの正念しょうねんハいのり」もしねかふへき事こと也臨終りんしゆの正念しょうねんをいのるは彌
 陀の本願ぼんねんをたのまぬ物ものそなんと申まをすハ善ぜん」導たうにハいかほとまさりたる學生がくしやうそとおもふ

へき」也あなあさましおそろし」

一念佛ハつねにおこたらぬか一定往生する事」にてある也されハ善導す、めての給ハク一發「三四・ウ」心已後誓畢此生無有退轉唯以淨土爲期」又云一心專念彌陀名號行住坐臥不問時」節久近念念不捨者是名正定之業順彼佛願故文といへりかやうにす、めまし」たる」事ハあまたおほけれどもことごとくにかきのせ」すたのむへしあふくへしさらにうたかふへから」す

「三五・オ」

念仏者は僣慢の
心をおこすべ
からず

一けにしく念佛を行してけにしくしき人に」なりぬれハよろつの人を見るにミなわか心には」おとりたりあさましくわろけれハわか身のよ」きま、にハゆ、しき念佛者にてある物かなた」れくにもすぐれたりと思ふ也この事をハよ」くく心えてつ、しむへき事也世もひろし」人もおほけれハ山の中林の中にこもりて「三五・ウ」人にもしられぬ念佛者の貴とくめてたきさす」かにおほくあるをわかきかすしらぬにてこそ」あれされハわれほとん念佛者よもあらしと思ふ」ハひか事也大僣慢にてあれハそれをたより」にて魔縁の付きて往生をさまたくる也されは」わか身のいミしくてつミをも滅し極樂へも」まいらハこそあらめひとへに阿彌陀の願力に「三六・オ」てこそ煩惱をも罪業をもほろほしうしな」ひてかたしけなく彌陀ほとけのつか

らみつ」からむかへとりて極樂へ返らせましますこ」となれされハわかちからにて往生する事なら」ハこそわれかしこしといふ慢心をハおこさめ」僞慢の心たにもおこりぬれハたちどころに阿彌陀ほとけの願にハそむきぬるものなれハ彌陀「三六・ウ」も諸佛も護念し給ハすなりぬれハ惡魔のた」めにもなやまさる、也返くも僞慢の心をおこ」すへからすあなかしこく」

念佛大意 第七

一向專修の念仏門

末代惡世の衆生 往生の心さしをいたさんにおき」ては又他のつとめあるへからすた、善導の」釋について一向專修の念佛門にいるへき也し「三七・オ」かるを一向に信をいたしてその門にいる人ハきわ」めてありかたしそのゆへハあるいハ他の行に心」をそめあるいハ念佛の功德をおもくせざるなる」へしつらくこれを おもふにま事しく往生淨」土の願ふかき心をもはらにする人ありかたき」ゆへかまつこの道理をよくく心うへき也すへて」天台法相の經論も教もそのつとめをいたさん「三七・ウ」に一つとしてあたなるへきにハあらずた、し」佛道修行ハよくく身をはかり時をはかるへき」なり佛の滅後第四の五百年にたに智慧をみ」かきて煩惱を斷する事かたく心をすまして」禪定をえん事かたきかゆへに人おほく念佛」門にいりけりす

仏道修行はよく
よく身をはかり
時をはかるべき
なり

なハち道綽善導等の淨土しやうと」宗の聖人しやうにんこの時の人なりいはんやこのころは「三八・
 オ」第五の五百年鬪諍堅固の時也他の行法ぎやうほうき」らに成就じやうじゆせん事かたししかのミな
 らす念佛に」おきてハ末法の、ちなを利益あるへしいはんや」いまの世は末法萬年の
 はしめ也一念も彌陀ねん」を念ぜんになんそ往生をとけさらんやたとひ」われこそそのう
 つは物にあらずといふとも末まつ」法のすゑの衆生にハさらに、るへからすかつうハ
 「三八・ウ」又釋尊在世の時すら即身成佛そくしんしやうふつにおきては」龍女のほかはいとありかた
 したとひ又即身そくしん」成佛しやうふつまでにあらずといふともこの聖道門しやうだうもんを」おこなひあひ給ひけ
 ん菩薩聲聞ぼさつしやうもんたちそのほ」かの權者こんしやひしりたちその、ちの比丘々々ひくひく」等いまにいた
 るまで經論きやうろんの學者がくしや法花經ほつくゑきやうの持ち」者しやい□そはくそやこ、にわれらなましゐ□聖しやう
 「三九・オ」道をまなふといふともかの人ひとにハさらにおよふ」へからすかくのこ
 ときの末代の衆生まつたいしゆしやうを阿彌陀あみだ」ほとけかねてきとり給ひて五劫ごこつのあひた思惟しゆい」して四十
 八願くわんをおこし給へりそのなかの第十八じゅうはち」の願くわんにいはく十方じふぱうの衆生しゆしやう心をいたして信樂しんがく」
 してわかくに、むまれんとねかひて乃至乃至十じゆ」念せんにもしむまれすといはハ正覺しやうがくを
 とらし「三九・ウ」とちかひ給ひてすてに正覺しやうがくをなり給へり」これを又釋尊しやくそんとき給
 へる經すなはち觀無量壽くわんむりやうじゆ等の三部經ふみやうなりしかれハた、念佛門也ねんぶもん」たとひ惡業あくごうの衆
 生しやうと等彌陀たうのちかひはかりに」なを信をいたさすといふとも釋迦しやくかのこれを一々いっさつ」にと

利益現在の名号
を称念すべし

往生の以後の見
仏聞法

末代の衆生、念
仏を専らにすべ
きこと

き給へる三部經ふみやうあにひとこととはもむなし」からんやそのうゑ又六方十方はうの諸佛しよぶつの證しやう
誠じやう「四〇・オ」この經きやうに見えたり他の行ぎやうにお□てハカ□□□□」ときの證しやう誠じやう見えす
しかれハ時ときもすき身みも」こたふましからん禪定ぜんぢやうぢぎ智慧ぢゑを修しゆせんよ」りハ利益りやくけんさい現在げんざいして
しかもそこはくのほと」けたち證しやう誠じやうし給へる彌陀みやだの名號なごうを稱念しやうねん」すへき也そもく
後世ごせ者のなかに極樂ごくらくハあ」さく彌陀みやだハくたれり期こするところ密嚴みくごん「四〇・ウ」花藏くわさうの
世界せかいなりと心こころをかくる人も待はるにや」それはなハたおほけなしかの土とハ斷無明たんむみやうの」菩
薩さつのほかハいる事ことなし又一向專修かうせんしゆの念ねん」佛門ぶつもんにいるなかにも日別にちへちに三萬遍さんまんへんもしハ五
萬ごまん」遍六萬遍へんろくまんへん乃至十萬遍乃至十まんへんといふともこれをつと」めおハリなんのち年來としごうじゆちやう受持じゆぢ讀誦じゆじゆの功
つも」り□□諸經しよきやうをもよみたてまつらん事ことつ□□「四一・オ」なる□□かと不審ふしんをな
してあさむくともか」らもまし□れりそれハつミになるへきにて」ハいかてかハ待はる
へき末代まつたいの衆生しゆじやうその行ぎやう成就じやうじゆし」かたきによりてまつ彌陀みやだの願力くわんりきにのりて」念佛ねんぶつ往
生じやうじやうをとけてのち淨土じやうどにて阿彌陀あみやだ如來にょらい」觀音くわんおん勢至ぜんせいにあひたてまつりてもろく」の聖しやう」
教けうをも學かしきとりをもひらくへきなり「四一・ウ」又末代まつたいの衆生しゆじやう念佛ねんぶつをもハらにす
へき事ことその」釋しやくおほかる中なかにかつうハ十方恆沙ごうじやうのほとけ證しやう」誠じやうし給ふ又觀經くわんぎやうの疏しよの
第三だいに善導ぜんたうの給たまハく」自餘衆行じよのしゆきやういへともなつくこれせんともしたくらふれハ雖しレ名なニ是善ぜしぜん一若比じやくひニ 念ねん一佛ぶつ一全非ぜんひニ比ひ一也や」是こ
故ゆへ諸經しよきやう中處ちゆうぢよ々廣讚くわうさん二念佛功能ねんぶつこうごう一如二無量壽にじゆめいじゆ」經四十八願きやうしじはちごん中一唯明下專念ちゆういちゑいげんじゆせん二名號にじやうごう一

得^{うと}レ生^{こと}上^を 又^き如^ハ三^ニ彌^ハ 陀^の經[□] 一[□] 日[□] 七[□] 日[□] 專^モ念^ハ二^レ彌^ノ陀^ノ名^ヲ號^シ一^レ得^ウレ生^ル一^レ 又^十 四^二・オ^一 方

恆^の諸^の佛^の證^の一^レ誠^ヲ 不^レ虛^ニ 也^ニ 又^此 經[□] 定^散 中[□] 唯^タ標^ヘ下^ス 專^ニ念^シ二^レ名^ヲ號^シ一^レ得^ウレ生^ル上^ニ 此^の例^非レ一^ニ

也^廣 顯^ニ 念^一 佛^一 三^昧 一^竟 とあり 又^善導^ノの 往^ウ生^ヲ 禮^シ讚^スの なかの 專^ニ修^シ雜^ニ修^スの 文^等にも

雜^{サツ}修^{シユ}のものハ 往^ウ生^ヲを 一^ウる 事^萬かなかに 二^ニなをかたし 專^ニ修^スのもの^ノハ 百^ニに 百^ナから

むまるといへり 此^レらハすな^ハ 八^チ何^ニ事^モその 門^ニにいり なんにハ 一^向にもハら

「四^二・ウ^一」他^ノの 心^コあるへからさるゆへなり たとへハ 今^今生^生にも 主^主君^君につかへ人^人をあ

ひたのむみち 他人^人に 心^心さししをわくると 一^向にあひたのむとひとしか^カらさる事^也

た、し家^家ゆたかにしてのり物^物 僮^僮僕^僕もかなひ 面^面々に 心^心さしをいたすちからも^も 一^タへた

るともからハかたく^クに 心^心さしをわくといへ^ヘとも □[□]の 功^功むなしからすかくのことき

の□□^{□□}ら 「四^三・オ^一」にたへさるものハ 所^所々^々をかぬるあひた身^身ハつ□[□]る^ルといへとも

そのしるしをえかたし 一^向に 人^人一人^人をたのめ 一^マまつしき物^物もかならずそのあ^あはれ

ミをうる也^也すなはち 末^末代^代惡^惡世^世の 無^無智^智の^の 衆^衆生^生ハかのまつしき物^物のこときなりむか

し^しの 權^權者^者聖^聖 人^人は家^家ゆたかなる 衆^衆生^生のことき^き 也^也しかれば 無^無智^智の 身^身をもて 智^智者^者の 行^行

をま 「四^三・ウ^一」なはんにおきて 一^マまつしき物^物の 得^得人^人をまな^な はんかことき也^也 又^又なを

たとへをとらはたかき^き 山^山の 人^人もかよふへくもなからん 巖^巖石^石をちか^からた□[□]んものい

しのかと木^木の 根^根にとりすかり^り 一^テのほらんとはけまん 一^ハ雜^雜行^行を修^修して 往^往生^生をねかは

一向專修には三
心を具足すべし

三心一つもかけ
ぬれば往生をと
げがたし

んかことときなりかの山のミねよりつ」よきつなをおろしたらんにすかりて□□
「四四・オ」らん□彌陀の願力をふかく信して一向に念」佛をつとめハ往生せんかこ
ときなるへし」又一向專修にハことに三心を具足すへき也」三心といふは一にハ至誠
心二にハ深心三には」迴向發願心也至誠心といふハ餘佛を禮せず」彌陀を禮し餘行
を修せず彌陀を念し」てもはらにしてもはらならしむる也「四四・ウ」深心といふハ
彌陀の本願をふかく信して」わか身ハ無始よりこのかた罪惡生死の凡」夫として生
死をまぬかるへきミちなき」を彌陀の本願不可思議なるによりて」かの名號を一向
に稱念してうたかひを」なす心なければハ一念のあひたに八十億劫」の生死のつミを
滅して最後臨終の時「四五・オ」かならず彌陀の來迎にあつかる也迴向」發願心と
いふハ自他の行を眞實の心の中」に迴向發願する也この三心一つもかけぬれ」は往
□をとげかたししかれハ他の□をま」しえんによりて罪になるへからすといへとも
なを念佛往生を不定に存していき、か」のうたかひをのこして他事をくわふる
「四五・ウ」にて侍るへき也た、しこの三心のなかに」至誠心をやうく心に心えてこ
とにまことをいた」す事をかたく申しなすともからも侍る」にやしからハ彌陀の本
願の本意にもたか」ひて信心ハかけぬるにてあるへき也いかに」信力をいたすといふ
ともからも造惡の凡」夫の身の信力にて願を成就せんほととの信「四六・オ」力ハい

曇鸞法師・道綽
禪師・善導大師
は專修念仏の一
行に帰す

かてか侍るへきた、一向に往生を決定」せんすれハこそ本願の不思議にてハ侍るへ
け」れさやうに信力もふかくよからん人のため」にハかくあなちち不思議の本願を
おこし」給ふへきにあらすこの道理をハ存しなから」ま事しく專修念佛の一行にいる
人ハいミ」しくありかたき也しかるを道綽禪師は「四六・ウ」決定往生の先達な
り智恵ふかくして講」説を修し給ひき曇鸞法師の三世已下の」弟子也かの曇師ハ智恵
高遠なりといへとも」四論の講説をすて、ひとへに往生の業を修」して一向にもはら
彌陀を念して相續無」間にして現に往生し給へりかくのことき」道綽ハ講説をやめて
念佛を修し善導ハ雜「四七・オ」修をきらひて專修をつとめ給ひき又道綽」禪師の
す、めによりて并州の三縣の人七」歳已後一向に念佛を修すといへりしかれハ」わか
朝の末法の衆生なんそあなちち雜修」をこのまんやた、すミやかに彌陀如來の願」
釋迦如來の説道綽善導の釋をまなふに」雜修を修して極樂の果を不定に存せんよ
「四七・ウ」りハ專修の業を行して往生ののそミを」決定すへきなりかの道綽善導等
の釋は」念佛門の人々の事なれば左右におよふへか」らす法相宗におきてハ專修念
佛門をは」信向せさるかと存するところに慈恩大師の」西方要決にいはいはく末法萬年餘
經悉滅彌」陀一教利物偏増と釋し給へり又おなし「四八・オ」き書にいはいはく三空九
斷之文十地五修之」訓生期分促死路非運」不レ如暫」息二多一聞之廣」學一專二

念一佛之軍修のくんしゆを一といへりしかのミならず」又大聖竹林寺の記にはく五臺山竹林寺の大講堂かうたうの中にして普賢文殊東西ふけんもんじゆとうさいに對たい一座ざしてもろくの衆生しゆしやうのために妙法めうぼうをとき給ふ時ときほ法照禪師せうせんしひさまつきて文殊もんじゆに問とひ「四八・ウ」たてまつりき未來惡世みらいあくせの凡夫ほんふいづれの法ぼうをおこなひてかなかく三界さいをいて、淨土じやうとにむまる、事をうへきと文殊もんじゆこたへての給ハ」く往生淨土わうしやうじやうとのハかり事彌陀ミタの名號ミヤうかうにすぎ」たるハなく頓證菩提とんじやうぼだいのミちた、稱念しやうねんの一門もんにありこれによて釋迦しやくか一代たいの聖教しやうかうに」おほくほむるところミな彌陀ミタにありいかに「四九・オ」いはんや未來惡世みらいあくせの凡夫ほんふをやとこたへ給へり」かくのこときの要文等智者やうもんとうちしやたちのおしへを」見てもなを信心しんくなくしてありかたき人にん」界かいをうけてゆきやすき淨土じやうとにいらさらん事」後悔こうわいなに事かこれにしかんやかかつうハ又」かくのこときの專修念佛せんしゆねんぶつのともからを當たう」世せいにもはら難なんをくわえてあさけりをなす「四九・ウ」ともからおほくきこゆこれ又むかしの權こん」者しやたちかねてまつさとりしり給へる」事也文殊の給ハく於おいて二未來世みらいせい一惡衆生あくのしゆしやう稱く二念ん」西一方彌陀號ほうのミタのなを一依よて二佛本願のほん一出い二生し一死し二以もて二直心ちきしん一故ゆへ生む二極樂ごくらく」云く善導ぜんたうの法事讚ほうしさんにはく世尊せそん説法時せつぼうとき願ねん一出い二生し一死し二以もて二直心ちきしん一故ゆへ生む二極樂ごくらく」云く善導ぜんたうの法事讚ほうしさんにはく世尊せそん説法時せつぼうとき將しやうレ一怒ど一懃しん付つ二囑彌陀名しゆくミタのなを一五濁ごじやく增さう時多ときおほく疑ぎ謗ぼう道だう」俗相嫌あひまうす不もちあレ用まレ聞き一見みレ有あ二修しゆ一行ぎやう一い起おこ二瞋毒しんとく一方い便べん破壞はわい「五〇・オ」競きやう生なレ怨あを一い如ごとレ此生し一盲闡まうぜん一提たい輩はい毀くわい二滅めつ一頓教とんかう一永沈淪えいしんりん」超てう二過くわ」大ち一い地微塵ちのちのこ劫きやう一未まレ可べレ得え二離り」三さん一途身つのしん一い大衆同たいしゆどう」

の行ハ多百千劫也こ、に「われらこのたひはしめて人界の生をうけ」たるにてもあらず世々生々をへて如來の教」化にも菩薩の弘經にもいくそはくかあひた「五二・ウ」てまつりたりけんた、不信にして教化に「もれきたれるなるへし三世諸佛十方菩薩」思へハミなこれむかしのとも也釋迦も五百」塵點のさき彌陀も十劫成道のさきハかたし」けなく父母師弟ともたかひになり給ひけ「んほとけハ前佛の教をうけ善知識のおしへを」信してはやく發心修行し給ひて成佛し「五三・オ」てひさしくなり給にけるわれらハ信心お」ろかなるゆへにいまに生死にとまれるなるへ」し過去の輪轉をおもへハ未來も又かくの」ことしたとひ二乗の心をおこすといふとも」菩提心をはおこしかたし如來ハ勝方便と」しておこなひ給へり濁世の衆生自力を」はけまさんにハ百千萬億劫難行苦行をい「五三・ウ」たすといふともその勤およふところにあらず」又かの聖道門ハよく清淨にしてそのうつ」ハ物にたれらん人のつとむへき行也懈怠不」信にしてハ中々行せさらんよりも罪業」の因となるかたもありぬへし念佛門に」おいてハ行住坐臥ねてもさめても持念す」るにそのたよりとかなくしてそのうつは「五四・オ」物をきらハすことくく往生の因となる事」うたかひなし」

彼佛 因中 立二弘誓 一聞レ名一念レ我一惣 來迎」

不^す下^げ簡^{かん}二^に貧^{ひん}一^{いつ}窮^{きゆう}一^{いつ}將^{じやう}富^ふ貴^き上^{じやう}不^すレ^レ簡^{かん}二^に下^げ智^ち與^{じゆ}高^{かう}才^{さい}一^{いつ}を
 不^すレ^レ簡^{かん}三^{さん}多^た聞^{もん}持^ち二^に淨^{じやう}戒^{かい}一^{いつ}不^すレ^レ簡^{かん}二^に破^は一^{いつ}戒^{かい}罪^{ざい}根^{こん}深^{しん}一^{いつ}を
 但^た使^し迴^ゑ一^{いつ}心^{しん}多^た念^{ねん}佛^{ぶつ}能^{よく}令^{して}三^{さん}瓦^わ礫^{れき}一^{いつ}變^{へん}成^{じやう}二^に金^{かね}一^{いつ}と

といへり又いミしき經論聖教の智者といへと「五四・ウ」も最後臨終の時その文を
 暗誦するにあたハ」す念佛においてハいのちをきわむるにいた」るまで稱念するに
 そのわつらひなし又」ほとけの誓願のためしをひかんにも薬師の」十二の誓願にハ不
 取正覺の願なく千手の」願ハ又不取正覺とちかひ給へるもいまた正」覺なり給ハす
 彌陀ハ不取正覺の願をおこ「五五・オ」して正覺なりてすてに十劫をへ給へり」か
 くのこときのちかひに信をいたさ、らん人ハ」又他の法門をも信仰するにおよはすし
 か」れハ返くも一向專修の念佛に信をいたして」他の心なく日夜朝暮行住坐臥に
 おこたる」事なく稱念すへき也專修念佛をいたすと」もから當世にも往生をとくる
 きこへそのかす「五五・ウ」おほし雜修の人においてハそのきこへきわ」めてありか
 たしそもくこれを見てもな」をよこさまのひかみんにいりて物難せんと」おもはん
 ともからハさためていよくいきとを」りをなしてしからハむかしよりほとけの」と
 きをき給へる經論聖教ミなもて無益の」いたつら物にてうせなんとするにこそなん
 と「五六・オ」あさけり申さんす□んそれハ天台法相の本」寺本山に修學をいとなミ

て名をも存し」おほやけにもつかへて官位をものそまん」とおもはんにおいてハ左
右におよふへからす又」上根利智の人ハそのかきりにあらずこの心」をえてよく了見
する人ハあやまりて聖道」門をことにおもくするゆへと存すへき也しかる「五六・
ウ」をなを念佛にあひかねてつとめをいた」さん事ハ聖道門をすてに念佛の助行に
も」ちあるへきかその條こそ返く」聖道門をう」しなふにてハ待りかれた、この念
佛門ハ」返くも又他の心なく後世を思はんともから」のよしなき僻胤におもむきて
時をも身を」もはからす雜行」修してこのたひ□□□」「五七・オ」ありかたき人
界□□まれてさハ□□りあひか」たかるへき彌陀のちかひをすて、又三途の舊」里に返
りて生」死に輪轉して多百千劫をへ」んかなしさを思ひしらん人の身のためを」申也
さらハ□□宗のいきとほりにハおよふへか」さる事也」

浄土宗略抄 第八

「五七・ウ」

このたひ生」死をはなる、ミち浄土にむまる」るにすきたるハなし浄土にむまる、
お」こなひ念佛にすきたるハなしおほかた」うき世をいて、佛道にいろにおほくの門
あ」りといへともおほ□□□□ちて二門を出す」なはち聖道門と浄土□□□□は

しめに聖道門しやうたうもんといハこの娑婆世しやはせ□□□□□□□□□□「五八・オ」たちざとりをひ□□道也ちこれにつきて「大乘の聖道しやうたうあり小乗の聖道しやうたうあり大乘に」又二ありすなはち佛乘ふつせうと菩薩乘ぼさつせうと也これらを惣そうして四乘せうとなつた、しこれらハ「ミなこのころわれらか身にたえたる事に」あらずこのゆへに道綽たうしやく禪師ぜんしハ聖道しやうたうの一種しゆハ「今時に證せうしかたしとの給たまへりされハおの「五八・ウ」おの、おこなふやうを申して詮せんなした、」聖道門しやうたうもんハ聞きとをくしてさとりかたくま」とひやすくしてわか分ぶんにおもひよらぬみ」ち也とおもひはなつへき也」

つきに淨土門しやうともんといハこの娑婆世界しやはせかいをいとひ」すて、いそきて極樂ごくらくにむまる、也かのくに、「むまる、事ハ阿あ陀佛たふつ□ちかひにて□の「五九・オ」善惡ぜんあくをえらはすた、ほとけのちかひをた□ミ」たのまさるによる也□のゆへに道綽たうしやくハ淨土じやうとの「一門もんのミありて通入つうにすへきみちなりとの給」へりされハこのころ生死しやうじをはなれんと思ハん」人ハ證しやうしかたき聖道しやうたうをすて、ゆきやすき淨土じやうとをねかふへき也この聖道淨土しやうたうじやうとをは難行なんぎやう道たう易行いぎやう道たうとなつけたりとへをとりてこれを「五九・ウ」いふに難行なんぎやう道たうハけわしきみちをかちにて「ゆくかことし易行いぎやう道たうハ海路かいろをふねにのりて」ゆくかことしといへりあしなえ目めしるた」らん人ハかゝるみちにハむかふからすた、「ふねにのりてのミむかひのきしにハつく也」しかるにこのころのわれらハ智惠ちゑのまな」こしる

て行きやう法のぽう□しおれたるとも□ら「六〇・オ」也□道どう難なん行ぎやうのけ□しきみちにハ惣そうして
 の「そミをたつへした、彌陀の本願ほんくわんのふねに」のりて生しやう死しのうミをわたり極樂ごくらくのき
 しに」つくへき也いまこのふねハすなハち彌陀の「本願にたとふる也その本願といハ
 彌陀のむか」しはしめて道心だうしんをおこして國王こくわうのく「らひをすて、出家しゅつげしてほとけに
 なりて衆しゆ「六〇・ウ」生しやうをすくはんとおほしめし、時淨ときしやうと土とを「まうけむために四十
 八願くわんをおこし給たまひし」なかに第十八たいの願くわんにいはいくもしわれほとけ」にならんに十方じふの
 衆生しゆしやうわかかくに、むまれ」んとねかひてわか名號みやうがうをとなふる事ことしも「十聲じしやうにいたるま
 てわか願力くわんりきに乗のりしてもし」むまれすハわれ□□けにならしと□かひ「六一・オ」給
 ひてその願くわんを□□□□□□ハして□ま」すてにほとけにな□て□劫じやくをへ給たまへりされ」
 は善導ぜんたうの釋しやくにハかのほとけいま現げんに世よにまし」まして成佛しやうぶつし給たまへりまさにしるへし」
 本誓ほんせい重願じゆうくわんむなしからす衆生しゆしやう稱念じゆうねんせはか」ならす往生わうしやうする事ことを得うとの給たまへりこのこ」
 とハリをおもふに彌陀みたの本願ほんくわんを信しんして念佛ねんぶつ「六一・ウ」申まをさん人じんハ往生わうしやううたかふへか
 らすよく／＼この「ことハりを思おもひときていかさまにもまつ」阿彌陀佛あみたつたのちかひをた
 のミてひとすちに「念佛を申まをしてことさとの人のとかくいひ」さまたけむにつきて
 ほとけのちかひをう」たかふ心こころゆめ／＼あるへからすかやうに心こころえて」さきの聖道しやうだう
 門もんハわ□□にあらすと思おもひすて、「六一・オ」この淨しやうと土門ともんにいりて□□すちにほと

信心積―二種深

相を現してう□に「虚假をいたく事なかれといへり念佛を申」さんについて人目にハ六萬七萬申すと披露」してま事にハさ程も申さすや又人の「見るおりハたうとけにして念佛申す」よしを見へ人も見ぬところにハ念佛申「六四・ウ」さすなんとするやうなる心はへ也されハとて「わろからん事をもほかにあらハさんかよ」かるへき事にてハなした、詮するところ「ハまめやかにほとけの御心にかなハん事を」おもひてうちにま事をおこして外相を」は譏嫌にしたか□□き也譏嫌にしたかふ」かよき事なれ□□□□て内心のま事「六五・オ」もやふる、まで□□まハ、又至誠心かけたる」心になりぬへした、うちの心のま事に」てほかをハとてもかくてもあるへき也かる」かゆへに至誠心となつく」

二に深心といハすなはち善導釋しての給ハ」く深心といハふかく信する心也これに二つ」あり一にハ決定してわか身ハこれ煩惱を「六五・ウ」具足せる罪惡生死の凡夫也善根薄少にし」て曠劫よりこのかたつねに三界に流轉し」て出離の縁なしとふかく信すへし二にハ」ふかくかの阿彌陀佛四十八願をもて衆生」を攝受し給ふすなハち名號をとなふる」事下十聲にいたるまでかのほとけの願」力に□□してきた□□て往□□を得と信して「六六・オ」乃至一念もうた□□□□□□へに深□□」なつく又深心といハ決定□□て心をた□□、佛」の教に順して修行してなかくうたかひ」をのそ

釈の心―はじめに我が身の程を信じて後に仏の誓いを信ず

きて一切の別解別行 異學異見異」執のために退失傾動せられされといへりこの」釋の心ハはじめにわか身の程を信して」のちにハほとけのちかひを信する也のちの信「六六・ウ」心のためにはしめの信をハあくる也そのゆへ」は往生をねかはんもろくの人彌陀の本」願の念佛を申しなからわか身貪欲瞋恚」の煩惱をもおこし十惡破戒の罪惡をも」つくるにおそれてみたりにわか身をかる」しめてかえりてほとけの本願をうた□ふ」善導ハかねてこの□たかひをか、みて二「六七・オ」つの信心のやうをあ□て□れらかこときの」煩惱をもおこし罪をもつくる凡夫□りと」もふかく彌陀の本願をあふきて念佛す」れハ十聲 一聲にいたるまで決定して往生」するむねを釋し給へりま事にはしめ」のわか身を信する様を釋し給ハさりせハ」われらか心はへのありさまにてハいかに念「六七・ウ」佛申すともかのほとけの本願にかなひかた」くいま一念十念に往生するといふハ煩惱をも」おこさすつミをもつくらぬめてたき人にて」こそあるらめわれらこときのともからに」てハよもあらしなんと身の程思ひし」られて往生もたのミかたきまであ□うく」おほへましにこの□つ□□心を釋し給□「六八・オ」たる事いミしく□にしみておもふへき」也この釋を心えわけぬ人ハミなわか心のわろ」けれハ往生ハかなハしなんとこそハ申あひ」たれそのうたかひをなすハやかて往生せぬ」心はへ也このむねを心えてなかくうたかふ」心のあるましき也

臨終正念は仏の
来迎による

臨終正念のみの
る人はゆゆし
き僻胤なり

ハ念佛申さん」と思ひハしめたらんよりいのちおはるまで」も申也中ハ七日一日も申
し下八十聲一聲」までも彌陀の願力なれハかならず往生」すへしと信していくら程
こそ本願な」れとさためす一念までも定めて往生す」と思ひ□□□□□□のちおハ
らんまで「七一・オ」□すへき也又まめやかに往生の心さし」ありて彌陀の本願をた
のミて念佛申」さん人臨終のわろき事ハ何事にかある」へきそのゆへハ佛の來迎し給
ふゆへハ行」者の臨終正念のため也それを心えぬ人」ハミなわか臨終正念にて念佛
申したらん」おりそほとけハむかへ給ふへきとのミ心え「七一・ウ」たるハ佛の本
願を信せず經の文を心えぬ」也稱讚淨土經にハ慈悲をもてくわへたす」けて心をし
てみたらしめ給ハすとと」かれたる也た、の□□□□くくく申しおきた」る念佛によりて
□ならすほとけハ來迎」し給ふ也佛のき□りて現し給へ□を見」□□□□□□□□す
□すへき□□□□れに□□□□「七一・オ」□念佛をハむなしく思□な□てよし」なき臨終
正念をのミいのる人のおほくあ」るゆ、しき僻胤の事也されハ佛の本」願を信せん
人ハかねて臨終をうたかふ心あ」るへからす當時申さん念佛をそいよく心を」いた
して申すへきいつかハ佛の本願にも」臨終の時念佛申たらん人をのミむかへんと
「七一・ウ」ハたて給ひたる臨終の念佛にて往生す」と申事ハもとは往生をねかハ
すして」ひとへにつミをつくりたる惡人のすてに」死なんとする時はしめて善知識の

別解別行の人に
念仏の信を破ら
れざれ

四重破人

す、「めにあひて念佛し□往生すところ観」經にもとかれたれ□□より念佛を信せん」人ハ臨終の沙汰をハ□なかにすへき様も「七三・オ」なき□也佛の來迎一定ならハ臨終の「正念ハ又一定とこそハおもふへきことハリなれ」この心をよく、心をと、めて心うへき事」也又別解別行の人にやふられされといハさと」りことにおこなひことならん人のいはん」事につきて念佛をもすて往生をもうた」かふ心なかれといふ事也さとりことなる「七三・ウ」人と申すハ天台法相等の八宗の學匠なり」行ことなる人と申すハ眞言止觀の一切の行」者也これらハ聖道門をならひおこなふ也」淨土門の解行にハことなるかゆへに別解別」行となつくる也又惣しておなしく念佛」を申す人なれと□□□の本願をハたのま」□□□自力をは□ミて□□□はかりにては「七四・オ」いか、往生すへき□□□徳をつくりこと佛に□□つかへてちからをあはせてこそ往生程の」大事をハとくへかれた、阿彌陀佛はかりにて」ハかなハしものをなんとうたかひをなし」いひさまたけん人のあらんにもけにもと思」ひて一念もうたかふ心なくていかなること」ハリをきくとも往生決定の心をうしなふ「七四・ウ」事なかれと申す也人にいひやふらるまし」きことハリを善導こまかに釋し給へり」心をとりて申さはたとひ佛まし／＼て」十方世界にあまねくみち／＼て光をか、」やかし舌をのへて煩惱罪惡の凡夫念佛」して一定往生すといふ事ひか事也信す」へからすと

の給ふともそれによりて一□「七五・オ」もうた□ふ□からすそ□□□□□□□□□□

□「に衆生を引導し給にすなハ□まつ阿彌」陀佛淨土をまうけて願をおこして

の給「ハく十方衆生わか國にむまれんとねかひ」てわか名號をとなへんものもしむ

まれます」ハ正覺をとらしとちかひ給へるを釋迦佛「この世界において、衆生のために

かの佛の「七五・ウ」願をとく給へり六方恆沙の諸佛ハ舌相を「三千世界におほふて

虚言せぬ相を現して」釋迦佛の彌陀の本願をほめて一切衆生を」す、めてかのほとけ

の名號をとなふれハきた」めて往生すとの給□□ハ決定にしてうたか」ひなき事也

一切□□□□この事を信す」□□□□證誠し□□□□く□□□□一切諸佛「七六・オ」

一佛ものこらす同心に一切凡夫念佛し□□決定して往生すへきむねをす、め給へる」

うゑにハいつれの佛の又往生せすとハの給「ふへきそといふことハりをもて佛きたり

て」の給ふともおとろくへからすとハ申す也」佛なをしかりいはんや聲聞緣覺をや」

いかにいはんや凡夫をやと心えつれハ一度「七六・ウ」この念佛往生を信してんのち

ハいかなる」人とかくいひさまたくともうたかふ心ある」へからすと申す事也これを

深心とハ申すなり」

三に廻向發願 心といハ善導これを釋して」の給ハく過去および今生の身口意業に」

修□□るところの世出世の善根および他の身「七七・オ」口意業□修するところの世

出世の善根を「隨喜してこの自他所修の善根をもてこ」とくく眞實深心の中に廻向してかのくに「に生まれんとねかふ也かるかゆへに廻向發願心となつくる也又廻向發願してむまる」といハかならず決定して眞實心の中に「廻向してむまる、事をうる思ひをなつ「七七・ウ」くる也この心ふかくしてなをし金剛のこ」とくして一切の異見異學別解別行の人」のために動亂破壊せられされといへりこの釋の心ハまつわか身につきて前世にもつく」りとつくりたらん功德をミなことくく極樂に廻向して往生をねかふ也わか身の功德」□□ならず一切凡聖の功德なり凡といハ凡「七八・オ」夫のつくりたらん功德をも聖といハ佛菩薩のつくり給はん功德をも隨喜すれハわか功德」となるをもミな極樂に廻向して往生を」ねかふ也詮するところ往生をねかふよりほ」かに異事をハねかふましき也わか身にも」人の身にもこの界の果報をいのり又おなし」く後世の事なれとも極樂ならぬ淨土に「七八・ウ」生まれんともねかひもしハ人中天上にむま」れんともねかひかくのことくかれこれに廻向」する事なかれと也もしこのことはりを思ひさ」ためさらんさきにこの土の事をもいのりあ」らぬかたへ廻向したらん功德をもミなとり」返していまハ一すちに極樂に廻向して往」生せんとねかふへき也一切の功德をミな極樂「七九・オ」に廻向せよといハたとて又念佛のほかになき」と功德をつくりあつめて廻向せよといふに」ハあらずた、

往生する心のあ
りさま―三心・
安心

すきぬるかたの功德をも今ハ一向に極樂に迴向しこの、ちなりともお」のつからた
よりにしたかひて僧をも供」養し人に物をもほとこしあたへたらんを」もつくらんに
したかひてミな往生のために「七九・ウ」迴向すへしといふ心也この心金剛のこと
くし」てあらぬざとりの人におしへられてかれこ」れに迴向する事なかれといふ也金
剛ハいかにも」やふれぬものなれハたとへにとりてこの心を」迴向發願してむまると
申也三心のあり」さまあらくかくの□としこの三心を具し」てかな□す往生すもし
一心も□□ぬれは「八〇・オ」むまる、事をえずと善導は釋し給ひた」れハもともこ
の心を具足すへき也しかる」にかやうに申たつる時ハ別々□して事く」しきやうな
れとも心えとけハやすく具□」ぬへき心也詮してハまことの心ありてふかく」佛の
ちかひをたのミて往生をねかはんする」心也深く淺き事こそかハリめありともたれ
「八〇・ウ」も往生をもとむる程の人ハさ程の心なき事」やハあるへきかやうの事ハ
疎く思へハ大事に」おほへとりよりて沙汰すれハさすかにやすき」事也かやうにこま
かに沙汰ししらぬ人も」具しぬへく又よくくしりたる人もかく」る事ありぬへし
れハこそいやくおろ」かなるもの、中にも往生する□□あり「八一・オ」いミしく
たとけなる□しりの中にも臨」終わろく往生せぬもあれされともこれを具」足すへき
様をもとくく心えわけてわか心に」具したりともしり又かけたりとも思」はんをハ

起行―五種正行

かまへてく具足せんとはけむへきこ」となりこれを安心となつくる也これそ往生わうじやうする心のありさまなるこれをよくく心え「八一・ウ」わくへきなり」

次に起行きぎやうといハ善導ぜんたうの御心おんこころによらは往生わうじやうの行ぎやうおほしといへともおほきにわかつて二

と」す一にハ正行しやうぎやう二にハ雜行ざうぎやう也正行しやうぎやうといハこれに又」あまたの行ぎやうあり讀誦とくしゆ正行しやうぎやう

觀くわん察さつ正行しやうぎやう禮拜らいはい」正行稱名しやうぎやうしやう正行讚嘆ぜんたんとく供養きやう正行しやうぎやうこれらを五種しゆ」の正行となつて讚嘆ざんたん

正行―正助二行

と供養くやうとを二行ぎやうとわか「八二・オ」つ時にハ六種しゆの正行とも申也この正行につ」きて

ふさねて二とす一にハ一心しんにもハら彌陀みだの名號みやうをとなへて行住坐臥ぎやうぢゆうざくわによ□ひる

わす」る、事なく念々ねんねんにすてざるを正定しやうぢやうの業ごうとなつてかのほとけの願くわんに順しゆんするか

ゆ」へにといひて念ねん□をもてまさしくきた」めたる往生わうじやうの業ごうにたて、もし禮誦らいしゆ等に

「八二・ウ」よるをハなつて助業しよごうとすといひて念」佛ぶつのほか阿彌陀佛あみだぶつを禮らいしもし

ハ三」部經ぶきやうをよみもしハ極樂ごくらくのありさまを觀くわん」するも讚嘆ざんたん供養きやうしたてまつる事」もミ

な稱名しやうみやう念佛ねんぶつをたすけんかためなり」まさしくきためたる往生わうじやうの業ごうハた、念」佛ぶつはか

りといふ也この正しやうと助しよとをのそきて「八三・オ」ほかの諸行しよぎやうをは布施しやくせをせんも戒がいをた

もた」んも精進しやうじんならんも禪定ぜんぢやうならんもかくの」ことくの六度と萬行まんぎやう法花經ほつげきやうをよミ眞言しんげん

を」おこなひもろくのおこなひをハことく」ミな雜行ざうぎやうとなつた、極樂ごくらくに往わう

生しやうせんと」おもハ、一向かうに稱名しやうみやうの正定業ぢやうごうを修しゆすへき也」これすなハち彌陀本願ほんくわんの行ぎやう

雜行

正定業は本願の

行

なるかゆへに「八三・ウ」われらか自力にて生死をはなれぬへくハかな」らすしも本願の行にかきるへからすといへ」とも他力によらすハ往生をとけかたきかゆへ」に彌陀の本願のちからをかりて一向に名號をとなへよと善導ハす、め給へる也自力といハわかちからをはけミて往生も」とむる也力といハた、佛のちからをたのみたて「八四・オ」まつる也このゆへに正行を修するものをハ專修の行者といひ雜行を行するをハ雜修の行者と申也正行を修するハ心つねにかの國に親近して憶念ひまなし雜行を行」するものハ心つねに間斷す迴向してむま」る、事をうへしといへとも疎雜の行となつく」といひて極樂にうとき行といへり又專修の「八四・ウ」もの八十人八十人なからむまれ百人百人な」からむまるなをもちのゆへにほかに雜縁なくして正念をうるかゆへに彌陀の本願」と相應するかゆへに釋迦の教に順するかゆへ」也雜修のものハ百人にハ二人むまれ千人にハ四五人むまるなをもちのゆへに彌陀の本願」と相應せざるかゆへに釋迦の教に順せざる「八五・オ」かゆへに憶想間斷するかゆへに名利と相應」するかゆへにみつからもさへ人の往生をもさふ」るかゆへにと釋し給ひたれハ善導を信して淨土宗にいらん人ハ一向に正行を修して」日々の所作に一萬二萬乃至五萬六萬十萬」をも器量のたへむにしたかひていくらな」りともはけミて申すへきなりとこそ心「八五・ウ」えられたれそれにご

れをき、なから念佛の」ほかに餘行よぎやうをくわふる人のおほくあるハ心こころえ」られぬ事也そのゆへハ善導ぜんたうのす、め給ハぬ」事をハすこしなりともくわふへき道理たうりゆめく」なき也す、め給へる正行しやうぎやうをたにもなをも」のうき身みにていましたす、め給ハぬ雜行さうぎやうをく」わふへき事ハまことしからぬかたもあり「八六・オ」ぬへし又つミつくりたる人たにも往生わうじやうす」れハまして功德くどくなれハ法花經ほつげきやうなんとをよ」まんハなにかハくるしかるへきなんと申す」人もありそれらハむけにきたなき事也」往生わうじやうをたすけハこそいミしからぬさまた」けにならぬハかりをいミしき事とてくわ」へおこなはん事ハなにかハ詮せんあるへき惡あくをハ「八六・ウ」されハ佛ほとけの御心ごこころにこのミてつくれとやす、め」給へるかまえてと、めよとこそいませしめ給」へとも凡夫ぼんぷのならひ當時たうじのまどひにひか」れて惡あくをつくる事ハちからおよはぬ事」なれハ慈悲しひをおこしてすて給ハぬにこそ」あれまことに惡あくをつくる人のやうに餘行よぎやうと」ものくわへたからんハちからおよはすた、「八七・オ」し經きやうなんとをよまん事を惡あくつくるにいひ」ならへてそれもくるしからねハまして」これもなんと、いはんハ不便ふひんの事也ふかき」御みのりもあしく心こころうるものにあひぬれハ」返りて物ものならずあさましくかなしき」事也た、あらぬさとりの人のもかくも」申さん事をハき、いれすしてす、ミぬへか「八七・ウ」らん人をハこしらへす、むへしさとりたか」ひてあらぬさまならん人なんとに論ろんしあ」ふ事なんとハゆめく

念仏をはげみて
位高く往生すべ
し―上品上生
念仏の現世利益

あるましき事也」た、わか身一人まつよく、往生をねかひて」念佛をはげみて位
かく往生していそ」き返りきたりて人、を引導せんとおもふ」へき也又善導の往
生禮讚に問ていはく阿彌「八八・オ」陀佛を稱念禮観するに現世にいかなる功德」
利益かあるこたへて□はく阿彌陀佛をとな」ふる事一聲すれハすなはち八十億劫の
重罪を除滅す又十往生經にいはいはくもし」衆生ありて阿彌陀佛を念して往生を」ねか
ふものハかのほとけすなハち二十五の菩薩をつかハして行者を護念し給ふもし
「八八・ウ」ハ行もしハ坐もしハ臥もしハよる」もしハひる一切の時一切の
ところに惡鬼惡神」をしてそのたよりをえしめ給ハすと又」觀經にいふこときハ阿
彌陀佛を稱念して」かのくに、往生せんとおもへハかの佛すなハち」無數の化佛無
數の化觀音勢至菩薩をつ」かハして行者を護念し給ふさきの二十五「八九・オ」の
菩薩の百重千重に行者を圍繞して」行住坐臥をとほす一切の時處にもしハひる」も
しハよるつねに行者をはなれ給ハすと又」いはく彌陀を念して往生せんとおもふも
の」ハつねに六方恆沙等の諸佛のために護念」せらるかるかゆへに護念經となつてい
ます」てにこの増上縁の誓願のたのむへきあり「八九・ウ」もろくの佛子等いか
てか心をはけまさらん」やといへりかの文の心ハ彌陀の本願をふかく信」して念佛し
て往生をねかふ人をハ彌陀」佛よりはしめたてまつりて十方の諸佛」菩薩觀音勢至

宿業かぎりあり
てうくべき病

転重軽受

無数の菩薩この人を圍繞して行住坐臥よるひるをもきはすか」けのことくにそ
いてもろくの横惱をなす惡「九〇・オ」鬼惡神のたよりをはらひのそき給ひて」現
世に□よこさまなるわつらひなく安穩」にして命終の時ハ極樂世界へむかへ給ふ也」
されハ念佛を信して往生をねかふ人ことさ」らに惡魔をはらはんためによろつのほ
け」かみにいのりをもしつゝしみをもする事」ハなしかハあるへきいはんや佛に歸し
法に「九〇・ウ」歸し僧に歸する人ニハ一切の神王恆沙の鬼神を眷屬」としてつねに
この人をまほり給ふといへ」りしかれハかくのこときの諸佛諸神圍繞」してまほり給
はんうゑハ又いつれの佛神か」ありてなやましきまたくる事あらん又」宿業かぎり
ありてうくへからんやまひは」いかなるもろくのほとけかみにいのるともそ
「九一・オ」れによるましき事也いのるによりてやまひ」もやミいのちものふる事あ
らハたれかハ一人」としてやミしぬる人あらんいはんや又佛の」御ちからハ念佛を信
するものをハ轉重軽受」といひて宿業かぎりありておもくうく」へきやまひをかる
くうけさせ給ふいはんや」非業をはらひ給はん事ましまさ、らんや「九一・ウ」され
ハ念佛を信する人はたとひいかなるやま」ひをうくれともミなこれ宿業也これより
も」おもくこそうくへきにほとけの御ちからに」てこれほともうくるなりとこそハ申
す事」なれわれらか惡業深重なるを滅して極樂に往生する程の大事をすらとけさせ

穢土を厭い極樂
を欣うべきこと

道光の註記

給ふ」ましてこのよにか程ならぬいのちをのへ「九二・オ」やまひをたすくるちか
らましまさ、らんや」と申す事也されハ後生をいのり本願をた」のむ心もうすき人ハ
かくのこことく圍繞にも」護念にもあつかる事なしとこそ善導」はの給ひたれおなしく
念佛すともふかく」信をおこして穢土をいとひ極樂をねかふ」へき事也かまえて心を
と、めてこのことハリ「九二・ウ」をおもひほときて一向に信心をいたして」つとめ
させ給ふへき也これらハかやうにこまか」に申のへたるはわたくしのことハおほくし
て」あやまりやあらんとあなつりおほしめ」す事ゆめくあるへからすひとへに善導
の」御ことはをまなひふるき文釋の心をぬきい」たして申す事也うたかひをなす心な
く「九三・オ」てかまへて心をと、めて御らんしときて心」えさせ給へき也あなかし
こくこの定に心え」て念佛申さんにすきたる往生の義ハある」ましき事にて候な
り」

本にはくこの書ハかまくらの二位の禪」尼の請によてしるし進せらる、書也
云云

黒谷上人語燈録卷第十二